

き し やま じょう あと
幾 志 山 城 跡

発掘調査報告書

—広島市安佐北区口田南二丁目所在—

2009 年 1 月

特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター

財団法人 広島市文化財団



幾志山城跡全景（北東方向から）



昭和 22 年（1947）撮影



昭和 49 年（1974）撮影

○印が幾志山城跡

は し が き

広島市の中央を南北に流れる太田川周辺の丘陵地には住居跡や古墳、山城などの遺跡が数多く存在しています。戦後、口田地域は団地の造成が行われており、まちの様子も大きく変わっています。それらの開発に伴い埋蔵文化財が発見され、発掘調査が実施されて、近年少しずつ昔の様子が明らかになっています。

幾志山城跡はこのたび、住宅地造成に伴い発掘調査による記録保存を行うこととなったものです。

本調査では14～15世紀の山城跡、貿易陶磁器、土師質土器などを検出しました。さらに築城以前の古墳に伴うと考えられる須恵器や土師器、管玉や、廃城後に構築された基壇状遺構、火葬墓などを検出しました。

本調査成果により、当地域における過去の人々の生活の一部を垣間見ることができました。本報告書が当地域の歴史研究、郷土理解を深めていただくためにご活用いただけましたら幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成21年1月

財団法人 広島市文化財団
特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター

例 言

1. 本書は、宅地開発工事に伴い実施した、広島県広島市安佐北区口田南2丁目所在の幾志山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は千代田ハウス有限会社の委託を受けて、特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンターが受託し、財団法人広島市文化財団の指導のもとに、濱岡大輔・長石紀子が調査を担当した。
3. 発掘調査は2008年8月5日から10月17日まで実施した。整理調査および発掘調査報告書作成作業は2009年1月30日までおこなった。
4. 現地調査での実測は、主に濱岡・長石がおこない、大型写真の撮影は長石がおこなった。
5. 本書の編集・執筆・遺物実測・トレースは濱岡がおこない、遺物写真撮影は有限会社N & N写真工房に委託した。
6. 本書使用の地図は、25,000分の1、50,000分の1は国土地理院発行のものを、2,500分の1は広島市発行の地形図を用いて、一部加筆して用いた。
7. 巻頭図版2は、昭和22年のものはアメリカ軍撮影のものである。いずれの写真も国土地理院発行のものを一部加筆して用いた。
8. 土層図及び土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修による『新版標準土色帖』を用いた。
9. 焼骨については、NPO法人人類学研究機構の松下孝幸、松下真実氏に鑑定していただき、玉稿を賜った。

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	7
IV 遺構と遺物	10
V ま と め	25
附 論	28

挿 図 目 次

第1図 幾志山城跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3	第15図 SK5 平面図 (S=1/50)	14
第2図 幾志山城周辺山城分布図 (S=1/50,000)	4	第16図 SB1 平面図、断面図 (S=1/80)	14
第3図 調査地位置図 (S=1/2,500)	6	第17図 SA1 平面図、断面図 (S=1/80)	15
第4図 調査前測量図 (S=1/500)	6	第18図 SA2 平面図、断面図 (S=1/80)	15
第5図 調査区土層断面図〔AB区・EF区〕 (S=1/80)	7	第19図 SX1 平面図、立面図 (S=1/30)	16
第6図 調査区土層断面図〔AH区・HI区〕 (S=1/80)	8	第20図 SX1 下層平面図 (S=1/30)	16
第7図 調査地内区割図	8	第21図 SX2 平面図 (S=1/50)	17
第8図 遺構配置図 (S=1/200)	9	第22図 SX3 平面図、土層断面図 (S=1/50)	18
第9図 SX4 平面図、立面図 (S=1/60)	10	第23図 出土遺物実測図① (1～17・24・25 S=1/3、18～22 S=1/4、23 S=1/16)	22
第10図 郭配置図	11	第24図 出土遺物実測図② (S=1/2)	23
第11図 SD4平面図 (S=1/60)	12	第25図 石製品・銭貨実測図 (1～7 S=1/2、8～13 S=1/1)	24
第12図 SK1平面図、土層断面図 (S=1/30)	13	第26図 表土・包含層出土遺物実測図 (S=1/3)	24
第13図 SK3平面図、土層断面図 (S=1/50)	13		
第14図 SK4石出土状況図、土層断面図 (S=1/50)	14		

表 目 次

第1表 周辺山城一覧表	5	第4表 遺物観察表 (貨幣)	21
第2表 遺物観察表 (土器)	20	第5表 遺物観察表 (石製品)	21
第3表 遺物観察表 (金属製品)	21		

図 版 目 次

図版 1	38	図版 7	44
1. 調査前風景（上空北から）		1. SD4上層青磁碗出土状況（北西から）	
2. 幾志山城南西斜面（南西から）		2. SX1階段状遺構検出状況（南東から）	
図版 2	39	3. SX1下層石出土状況（南から）	
1. 幾志山城から西方向の風景（東から）		図版 8	45
2. 幾志山城から南方向の風景（北から）		1. SK1上層遺物出土状況（東から）	
3. 幾志山城から北東方向の風景（南西から）		2. SK1鉄鏃出土状況（東から）	
図版 3	40	3. SK3鉄鏃出土状況（北から）	
1. 調査区東方向風景（大歳神社を望む）		図版 9	46
2. 調査区全景（低空東から）		1. H・I区土層断面（北東から）	
3. 調査区全景（真上南西から）		2. SX2石検出状況（北から）	
図版 4	41	3. Pit6遺物出土状況（南東から）	
1. 調査区北側全景（南東から）		4. Pit54遺物出土状況（北西から）	
2. 調査区南側全景（北西から）		5. 調査終了直後の幾志山城跡（大歳神社から望む）	
3. 火葬墓（Pit12・15）土層断面（北から）		図版10.....	47
図版 5	42	1 ～ 19. 出土遺物①	
1. SX4石列検出状況（北から）		図版11.....	48
2. SX4完掘状況（北から）		1 ～ 36. 出土遺物②	
3. SB1完掘状況（南東から）		図版12.....	49
図版 6	43	1 ～ 28. 出土遺物③	
1. SD4石検出状況（南西から）			
2. SD4石検出状況（北東から）			
3. SD4完掘状況（北東から）			

I はじめに

広島市市民局文化スポーツ部文化財担当（以下「市民局」）は、平成17年10月12日に千代田ハウス有限会社から、広島市安佐北区口田二丁目289番2ほか7筆における住宅地造成に伴う工事において、埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについての照会を受けた。市民局はこれを受けて、対象地が中世の城跡とされていることを平成17年10月17日に回答した。以後、当該遺跡の取り扱いについての協議が重ねられたが、計画変更による遺跡の現状保存は困難との結論に達し、開発工事に先立って発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることとなった。

これを受けて、調査委託者である千代田ハウス有限会社と、発掘調査の管理・監督を行う財団法人広島市文化財団文化財課及び特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンターが発掘調査実施についての契約を締結し、現地調査を平成20年8月から10月にかけて、本報告書の作成を同年10月から平成21年1月にかけてそれぞれ実施した。

発掘調査の関係者は、下記のとおりである。

調査委託者 千代田ハウス有限会社

調査主体 財団法人 広島市文化財団 文化財課

特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター

調査関係者 檜垣榮次（広島市市民局文化スポーツ部文化財課）

片山和哉（広島市市民局文化スポーツ部文化財課）

若島一則（財団法人 広島市文化財団）

田村規充（財団法人 広島市文化財団）

重森正樹（特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター）

調査担当者 濱岡大輔（特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター）

長石紀子（特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター）

調査補助員 岡本真澄 国本義春 田上健吾 田中 実 谷口紀子 長力初江

堂山君枝 中村照夫 中村春男 新田民江 広田武子 三田春雄

整理作業員 谷口紀子 堂山君江 吉見紗織

現地調査から報告書作成にいたるまで下記の方々や機関等からご教示、ご協力をいただきました。また、現地調査におきましては周辺住民の皆様ほか多くの方々に、円滑に調査が行えるよう多大なるご配慮とご協力をいただきましたことをここに記して、謝意を表したい。

朝日精版印刷株式会社 株式会社河崎組 株式会社森商 株式会社ワキタ 安森機工株式会社
有限会社ウイング 有限会社N & N写真工房 有限会社芸備商事 有限会社橋本事務所

財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室

NPO 法人人類学研究機構 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

篠原芳秀 新川隆 高下洋一 榎木敬太 福原茂樹 松下孝幸 松下真実 松原啓

特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンター会員の皆さま

Ⅱ 位置と環境

1 地理的環境

幾志山城跡は、広島市安佐北区口田南2丁目に所在する。本遺跡は、太田川の東岸にある低丘陵上に位置し、標高は遺跡の最高地で26mを測る。西方には太田川とともに安芸国守護の本拠として知られる銀山城跡が築かれている武田山が眼前にあり、南西方向には広島湾、さらに先には宮島まで眺望することのできる位置にある。調査地北側には松笠山（標高331.5m）から派生しており、本来尾根続きであったと考えられる丘陵があり、遺跡北側の視界を遮っている。

2 歴史的環境

今回調査を行った幾志山城跡周辺では数多くの遺跡が存在し、発掘調査が行われている。ここでは、いくつかの主要な遺跡について概要を述べる。

・上小田古墳（第1図2）

本調査位置北側丘陵上の大歳神社境内に位置している。直径約15mの円墳で、5枚の切石からなる組合せ式石棺を埋葬施設としている。床面には4～5cmの厚さに玉砂利が敷き詰められていた。副葬品には鉄剣・鉄刀・鉄鎌・鉄斧が出土している。5世紀初頭頃のものと考えられている。

・弘住遺跡（第1図3）

弥生時代中期頃の配石遺構、古墳時代前半期のものと考えられる古墳4基などが確認されている。弘住第3号古墳は直径約25mの円形の墳丘に東西方向に幅5mの突出部が付く墳形をしており、内部主体は内法全長約2.7m・幅1.2mの竪穴式石室である。副葬品には、鉄鏃や鉄斧などの鉄製品があり、石室上に供献された土師器より3世紀末に築造されたものと考えられている。

・中小田古墳群（第1図4）

標高90～100mの細い丘陵尾根上に位置し、国指定史跡に指定されている遺跡である。太田川下流域における代表的な古墳群である。1号墳は全長約30mの前方後円墳で、竪穴式石室を内部主体としており、石室からは三角縁神獣鏡や車輪石などが出土している。4世紀中頃のものと考えられている。2号墳は直径約15mの円墳で、竪穴式石室を内部主体としており、三角板鋌留短甲や横矧板鋌留衝角付冑をはじめとしていろいろな種類の鉄器を数多く出土している。5世紀中頃のものと考えられている。

・大明地遺跡（第1図8）

弥生時代中期から古墳時代初頭頃の集落、古墳、近世の火葬墓が出土している。集落跡の遺構として、段状遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを中心に数多くの遺構が出土している。3基確認された古墳の中で、1号墳からは石釧や古式土師器、2・3号墳からは初期須恵器などが出土している。

・西願寺山墳墓群（第1図15）

標高30～70mの太田川に向かってのびる丘陵尾根上に位置する弥生時代から古墳時代初頭にかけて営まれた墳墓群である。河原石で構築された竪穴式石室などが検出されており、弥生時代の集団墓的な要素と古墳時代の竪穴式石室という古墳的な要素を兼ね備えた墳墓として捉えられている。D群の竪穴式石室からは、鑄造鉄斧、鉄剣、鉄鎌、鉄鑿・鉄鑿などの工具類が出土している。

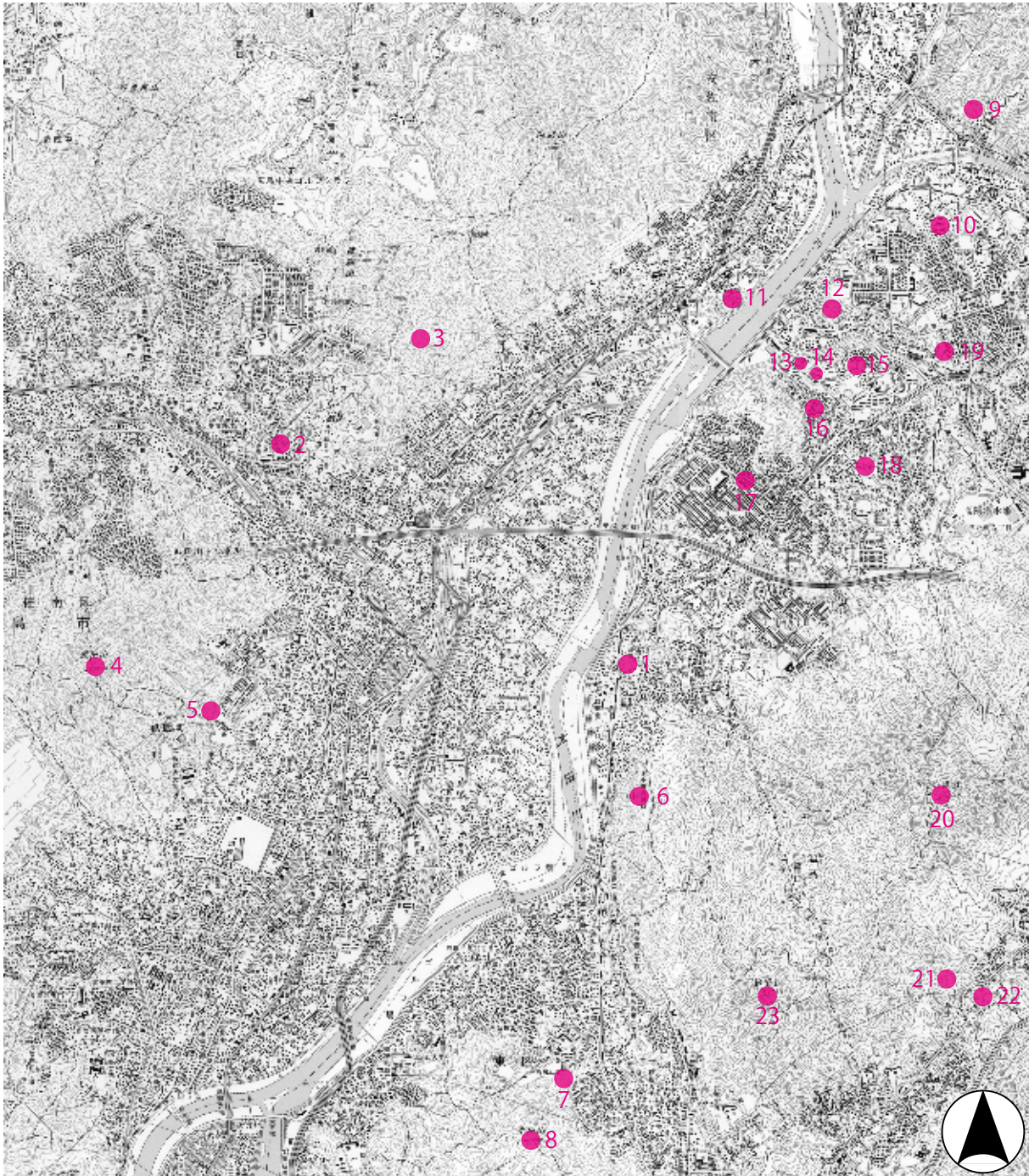


- 1.幾志山城跡 2.上小田古墳 3.弘住古墳群 4.中小田古墳群 5.山武士古墳群 6.湯釜古墳 7.長尾古墳群
 8.大明池遺跡 9.大久保遺跡 10.大久保古墳 11.中矢口遺跡 12.道川遺跡 13.高陽台A地点遺跡 14.城前遺跡
 15.西願寺遺跡群 16.西願寺北遺跡 17.梨ヶ谷遺跡 18.地藏堂山古墳群 19.山手古墳群 20.金平遺跡
 21.宇那木山古墳群 22.神宮山古墳

第1図 幾志山城跡周辺遺跡分布図 (S= 1/25,000)

・小田狐城跡（第2図6）

幾志山城跡とともに『芸藩通志』に記されている、旧「小田村」内に位置している山城で中小田古墳群が位置する尾根上に形成されている山城である。遺構としては、堀切や豎堀が確認されている。



1. 幾志山城跡 2. 白山城跡 3. 中野城跡 4. 銀山城跡 5. 尾首城跡 6. 小田狐城跡 7. 戸坂支城跡
8. 戸坂城跡 9. 尾和城跡 10. 深川狐ヶ城跡 11. 八木城跡 12. 恵下山城跡 13. 土居城跡
14. 地藏堂山城跡 15. 山手城跡 16. 土居山城跡 17. 池田城跡 18. 岩上城跡 19. 諸木城跡
20. ニツ城跡 21. 尾上城跡 22. 津村城跡 23. 田原城跡 2

第2図 幾志山城周辺山城分布図 (S= 1/50,000)

第1表 周辺山城跡一覧表

番号	名称	所在地	現状	保存状況	立地	標高	比高	遺構の内容
1	きしやま 幾志山城跡	安佐北区口田南2丁目	山林	一部壊	丘陵先端	24	12	郭
2	はくさん 白山城跡	安佐南区毘沙門台	宅地	全壊	丘陵先端	60	50	郭、堀切、石垣
3	なかの 中野城跡	安佐南区緑井	山林	完存	丘陵頂部	199	190	郭、土塁、空堀、堀切
4	かなやま 銀山城跡	安佐南区相田、大町、 祇園、山本	山林	完存	丘陵頂部	410	370	郭、堀切
5	おくび 尾首城跡	安佐南区祇園8丁目	学校用地	全壊	丘陵先端	65	22	郭、堀切、石垣、堅堀
6	おだきつね 小田狐城跡	安佐北区口田南3丁目	山林	完存	丘陵先端	124	104	郭
7	へさかし 戸坂支城跡	東区戸坂南	山林	良好	丘陵先端	91	50	郭、堀切
8	へさか 戸坂城跡	東区戸坂南、牛田新町	山林	良好	丘陵頂部	260	232	郭
9	おわ 尾和城跡	安佐北区深川2丁目	山林、 寺社境内地	完存	丘陵先端	74	54	郭、堀切
10	ふかわきつね 深川狐ヶ城跡	安佐北区深川1丁目、 亀崎2丁目	宅地	全壊	丘陵先端	56	42	
11	やぎ 八木城跡	安佐南区八木5丁目	山林	一部壊	丘陵先端	69	50	郭
12	えげやま 恵下山城跡	安佐北区真亀	山林、公園	完存	丘陵頂部	69	65	郭、石垣
13	どい 土居城跡	安佐北区落合	道路、宅地	全壊				
14	じぞうどうやま 地藏堂山城跡	安佐北区落合3丁目	宅地	全壊	丘陵先端	56	42	郭、堀切
15	やまて 山手城跡	安佐北区落合3丁目	宅地	全壊	丘陵先端	63	50	郭
16	どいやま 土居山城跡	安佐北区落合	宅地	全壊				
17	いけだ 池田城跡	安佐北区落合	宅地	全壊				
18	いわのうえ 岩上城跡	安佐北区落合南3丁目	宅地	一部壊	丘陵先端	51	10	郭、堀切、堅堀
19	もろき 諸木城跡	安佐北区落合5丁目	宅地	全壊	丘陵先端	70	33	郭
20	ふたつが 二ヶ城跡	東区馬木、 安佐北区口田南	山林	良好	丘陵頂部	483	253	郭
21	おのえ 尾上城跡	東区馬木	山林、墓地	良好	丘陵先端	170	40	郭
22	つむら 津村城跡	東区馬木	山林	全壊	丘陵先端			
23	たはら 田原城跡2	東区戸坂新町、温品町	山林	良好	丘陵頂部	374	267	郭

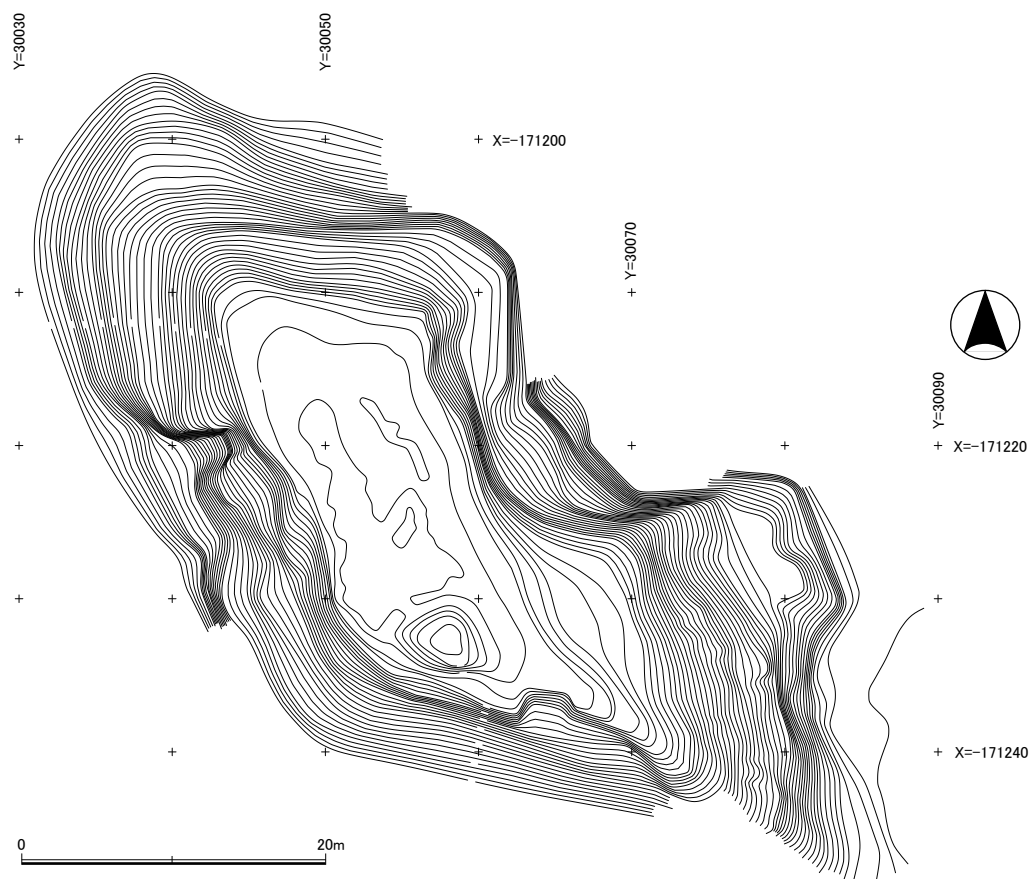
左図及び上図は、1993年発行の広島県教育委員会編集の『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』を基に作成。

3 幾志山城跡について

幾志山城という名称は、19世紀に編纂された『芸藩通史』において「岸ノ城」と記されているのが史料においての初出となる。それより古い資料では、高陽町史記載の小田村の「正徳村絵図」（正徳年間1711～1715年）において、「古城」として幾志山城に相当する山城跡が記されている。この絵の形が当時の幾志山城の形を少しでも表現できているものだと仮定すると、主郭となる1の郭と面積の最も広い2の郭という2段の郭によって構築されているものと考えることができる。



第3図 調査地位置図 (S=1/2,500)



第4図 調査前測量図 (S=1/500)

Ⅲ 調査の概要

1 調査方法と経過

本調査は、宅地造成工事に伴って実施されたもので、対象となったのは山城と想定されている丘陵部分 1200㎡であった。この丘陵は全体が竹で覆われており、周囲は民家が近接している状態であった。丘陵自体はいずれも急斜面で、丘陵頂上部のみに平坦面が認められている状況であった。

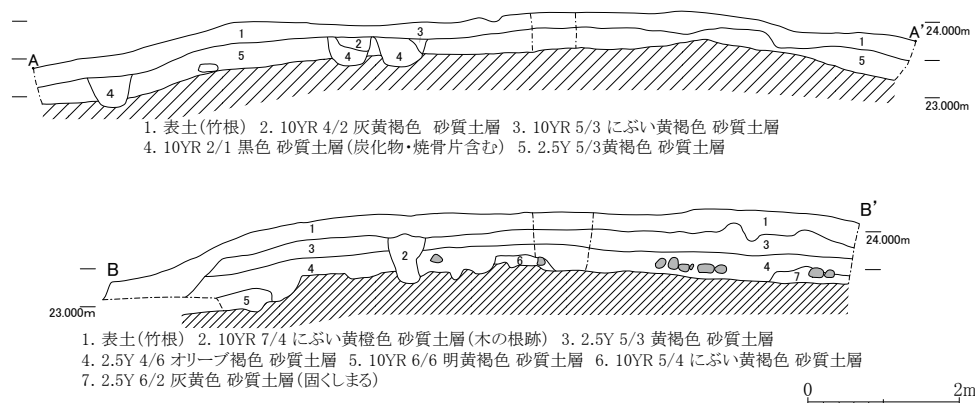
丘陵部の斜面には、山城に伴う遺構（竪堀など）があることが想定されたが、竹や樹木の伐採後の地形観察の結果、岩盤及び地山が露出しており、後世の地形の改変により種々の遺構は認められなかった。

また、急斜面で作業を行うにはあまりにも危険な状況であるため、急斜面部分においては一部トレンチを入れることとどめ、丘陵頂上部の平坦面約 400㎡に重点をおき調査を実施した。調査区内は、広島市市民局による試掘トレンチを基準に土層観察用のアゼを設定し、地区を A～I 地区に分けた。

調査現場の周囲は民家が近接し、かつ丘陵周囲が急斜面で、重機等の搬入が困難なため、表土掘削・竹や木の抜根など全て人力により行った。表土除去後は、遺物包含層を掘り下げ、無遺物包含層上面において慎重に遺構検出を行った。検出した遺構は、山城の遺構として郭を 3 つ確認し、最高所にあたるものを第 1 郭、第 1 郭の下段にあたる郭で平坦面の面積が最も広いものを第 2 郭、第 2 郭の下段にあたる郭を第 3 郭とした。他の遺構として基壇状遺構・階段状遺構・溝・土坑・柵列・掘立柱建物・火葬墓・ピットなどを確認した。

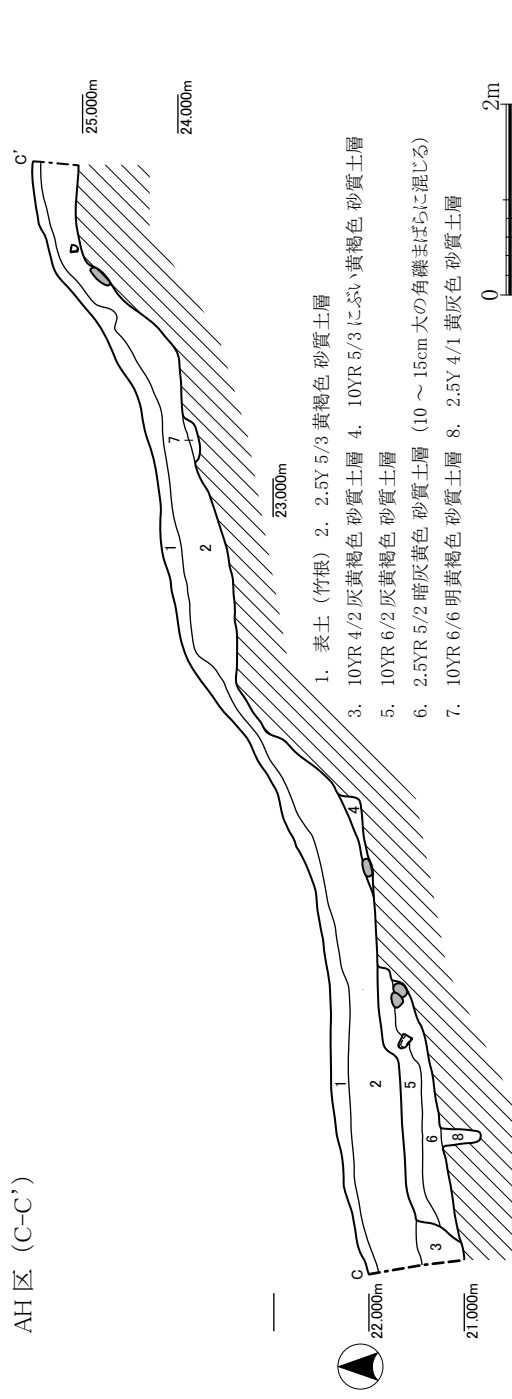
2 基本層序

本遺跡の基本層序として、調査区内中央付近を挙げたい。第 1 層は深さ約 20cm の表土で、竹根・腐葉土が主体で、近現代の遺物が含まれる。第 2 層は約 25cm の遺物包含層である。幾志山城跡のほぼ全面に堆積している層で、土師質土器皿や鉄釘などの中世期の遺物を包含している層である。第 3 層は地山（無遺物包含層）である。本調査においては、第 3 層上面において遺構検出をおこなった。地山は花崗岩の風化したもので、一部岩脈も走っている箇所も多くみられた。

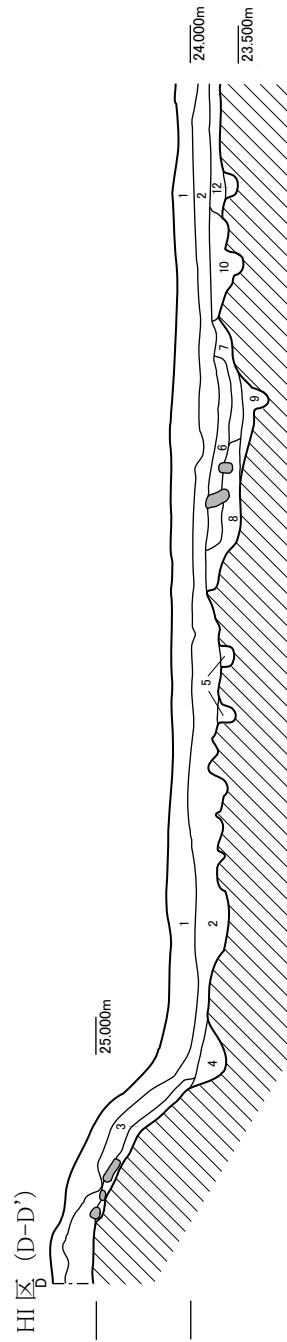


第 5 図 調査区土層断面図〔AB 区・EF 区〕(S= 1/80)

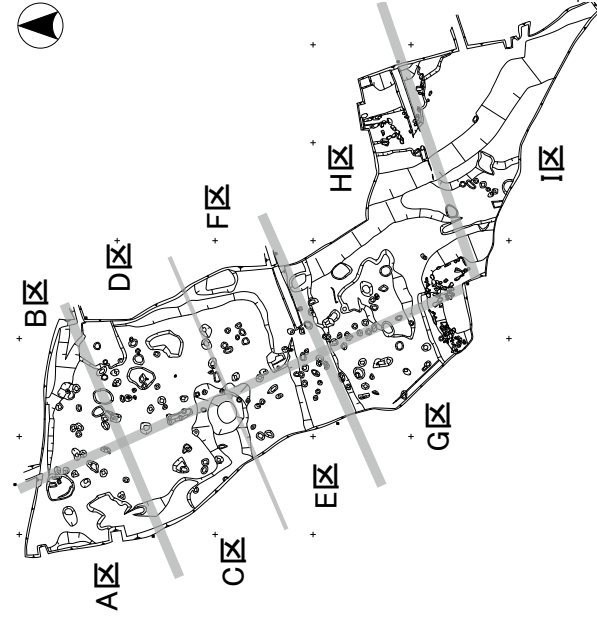
AH 区 (C-C')



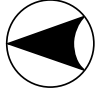
HI 区 (D-D')



第7図 調査地区内区割図



第6図 調査区土層断面図 [AH 区・HI 区] (S=1/80)



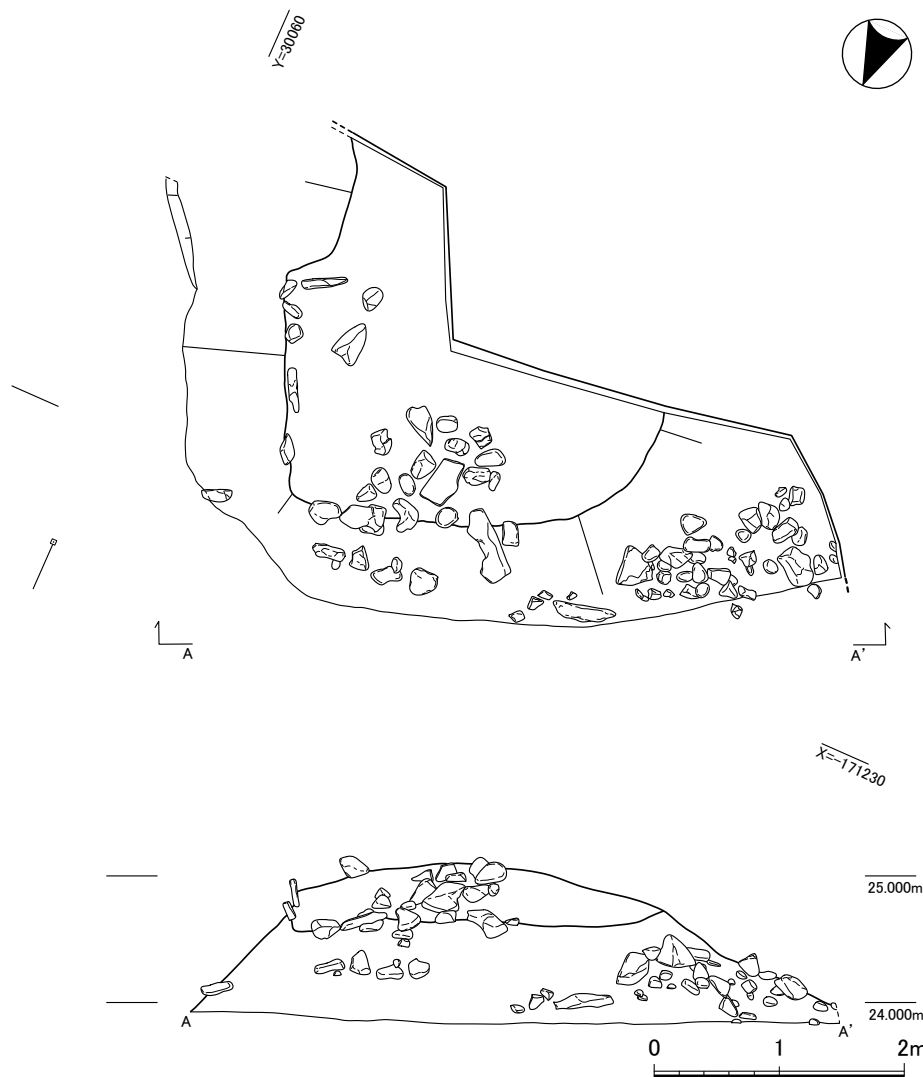
第8図 遺構配置図 (S= 1 /200)

IV 遺構と遺物

1 山城廃棄後の遺構

基壇状遺構 SX 4 (第9図・図版5-1・2)

調査区 G・H 区の最高所(標高 23.8 m～26.2 m)において基壇と考えられる石列を検出した。この石列は、山城として活用されなくなった後に山城の第 1 郭を部分的に活用して、設けられた施設と考えられるものである。石列には 10cm～60cm 大の石が用いられており、上場には約 1.6m 四方の区



画が確認できた。これらの石は地山面を掘削して据えられおり、北面の石は立位状態で据えられていた。この石で区画された内外には、柱穴などの他の遺構は認められなかった。

またこの区画の下方は地山面を覆うように川原石を貼り付けるようにして並べられており、石と石が積み重なっている石垣というよりは地山面を覆うための貼石として捉えられるもので、貼石は山城の第 1 郭部分の裾を廻らしていたと考えられる溝(SD 4)の埋没後に構築されたと考えられる。

第9図 SX4 平面図、立面図 (S=1/60)

遺物としては、この基壇状遺構を覆う包含層からは中・近世期の遺物が出土しており、石除去中には管玉が 1 点のみ出土している。憶測ではあるが、小さな祠などを祀るための基壇を想定している。時期は、中世後半以後と考えられる。

火葬墓 [ST1・2 Pit12・15] (図版4-3)

調査区 B 区・D 区北側に集中して検出された。ST1・2 においては B 区 SX2 の上方で確認した。いずれの遺構も、平面形態が直径約 40cm の円形を呈した深さ 30～40cm の穴である。層位から見ると表土直下より掘り込まれている穴で、埋土には細かな炭や灰が多く混じった土が充満しており、炭や

灰の他に焼骨・土師皿・鉄釘などの遺物が含まれていた。土師質土器皿や磁器（唐津焼）の破片も一部含まれているものもあった。いずれの穴の底部やその周囲には被熱した痕跡が認められないことから、幾志山城跡の頂上部以外の場所で遺体を火葬し、その遺灰をこの地まで持ってきて茶毘にふせたと想定できる。

また、この火葬墓を検出した範囲からは、表土掘削中から 10 ～ 30cm 大の川原石が数個出土していたが、そのほとんどが竹根に絡まっていた状態であったために、遺構検出前に竹根とともに取り上げてしまった。これらの川原石が、火葬墓の墓標であった可能性も考えられる。

この火葬墓出土遺物においては、類例が乏しく時期を断定するには至らなかった。上記の基壇状遺構と同様に、山城としてこの地が活用されなくなった後の時代のものとして捉えておきたい。出土した焼骨に関しては、附論を参照していただきたい。

2 中世山城の遺構

山城の遺構として郭を 3 つ確認し、最高所にあたるものを第 1 郭、第 1 郭の下段にあたる郭で平坦面の面積が最も広いものを第 2 郭、第 2 郭の下段にある帯郭状の郭を第 3 郭とした。（第 10 図）

第 1 郭

第 1 郭は、本調査区の最高所（標高 26m）に位置している。現状での平面形態は不整形な三角形で、東西長 4 m、南北長 5 m で、面積としては約 10m²である。第 1 郭南側・東側の大部分は、すでに削平されており、岩盤や地山が露出した状態で、山城であった当時の平面形態のすべてを想定するのも難しい状態である。頂上部は平坦面は僅かしか残存しておらず、そのほとんどが斜面となっている。第 2 郭との比高差は、0.6 ～ 0.96m で傾斜は 40°ある。比高差に幅があるのは、斜面の北側部分と東側部分に差があるためで、北側（第 2 郭・第 3 郭側に面する側）の斜面の方が、傾斜が厳しくなっている。



第 10 図 郭配置図

第 2 郭

第 2 郭は平面形態が南北 12m、東西 32m の長楕円の郭で、本調査区で最も広い平坦面（8.5 × 29m）を有している。この郭も南・東側は大きく削平されており、北側も部分的に削平されている。この北側の削平部分は調査前は竖堀のように見えるものであったが、地山が露出しており、隣接する宅地と非常に近接しているという点から、近年削平されたものと考えられる。第 3 郭との比高差は 1.4m あり、斜面の傾斜は 50°ある。平坦面の周囲においては土塁のような構築物は確認することはできなかった。この第 2 郭には、土坑・溝・柱穴など多くの遺構が検出された。

第3郭

第3郭は現状で南北5m、東西13mの郭で、第2郭の東側に位置している。部分的ではあるが、残存している平坦面の幅が狭い状況から帯郭とも考えられ、第2郭を囲うように配された郭と考えられる。本郭も他の郭と同様に南側は大きく削平されている。

溝

SD 1（第8図）

調査区H・I区中央、第2郭東側に位置している幅2m、深さ12～25cmの南北方向に走る溝である。遺物は出土しなかった。

SD 2・3（第8図）

SD2・3は調査区G・H区第1郭の裾（SD2は東側、SD3は北側）に位置する溝で、幅50～70cm、深さ10～30cmである。この溝からは、備前焼播鉢、亀山焼鉢、土師質土器皿の破片が出土した。

SD 4（第11図、図版6－1・2・3、図版7－1）

SD4は調査区のほぼ中央（調査区E～H区）に位置しており、第2郭を東西に分けるように南北方向に走る溝で、幅3.1m、長さ8m、深さ30cmである。土層断面図は第6図（中段図面）を参照。北側中央は溝より後に削平されたと考えられる落ち込みがある。溝の北側は第2郭の斜面へと境なく続いており、南側もそのようになっていたと想定される。位置から壕とも考えられたが、全体的に浅くその効果を発揮するには至らないと想定できるため、第2郭を区画するための溝として考えたい。

溝の中には20～30cm大の川原石が約130個入っており、いずれも溝底より10～15cm高いと



第11図 SD4 平面図 (S=1/60)

ころに位置しており、折り重なっているだけで列になるなどの規則性は認められなかった。

憶測ではあるが、この川原石は築城時に古墳を破壊した時に出てきた葺石か石室石材で、築城後も石材を廃棄せずに、投げ落とすのに適した大きさの川原石を城の防御用の投石として山上に置いていたものとも考えられる。

遺物は土器類では、青磁碗、亀山焼甕、備前焼甕、土師質土器皿が出土し、金属製品では鉄鎌が出土している。

土坑

SK 1（第 12 図、図版 8－1・2）

調査区の北西側（D 区）に位置する、長軸 2 m、短軸 1.4 m の平面形態が不整形の楕円形を呈する土坑である。この遺構上には掘立柱建物 SB1 の柱穴が 1 つ位置しているが、遺構の前後関係からこの土坑が後に作られたと考えられる。深さは 20 ～ 25 cm で炭化物が混じった土が埋まっていた。炭や鉄釘などの鉄製品が多く認められたが、土坑の底面や壁面には被熱の痕跡などは認められなかったため、廃棄土坑として位置づけておく。

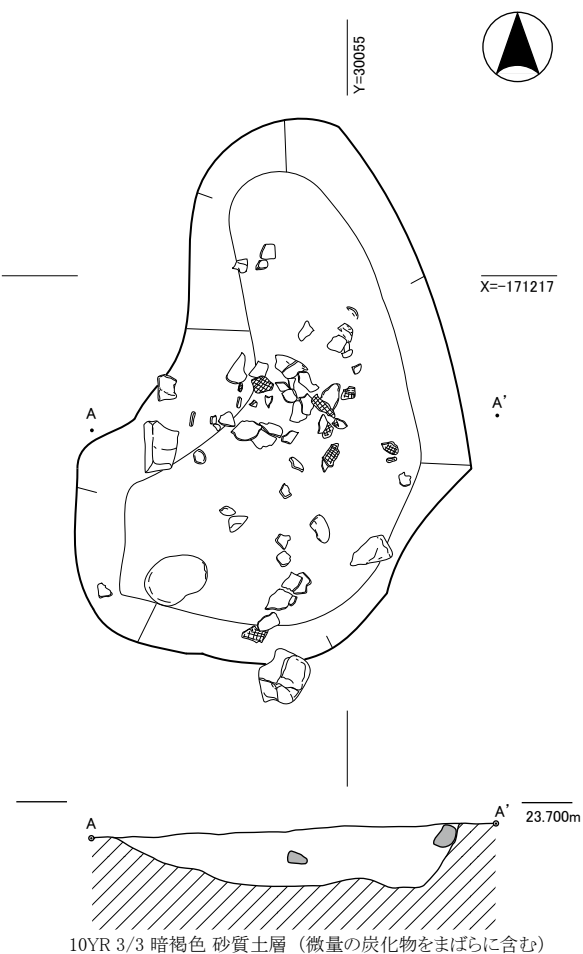
この遺構の検出面からは 1 個体分となる亀山焼甕（第 22 図 23）の破片が散乱した状態で検出した。遺物は、亀山焼甕の他、備前焼甕、土師質土器皿、鉄鎌、鉄釘が出土している。

SK 2（第 8 図）

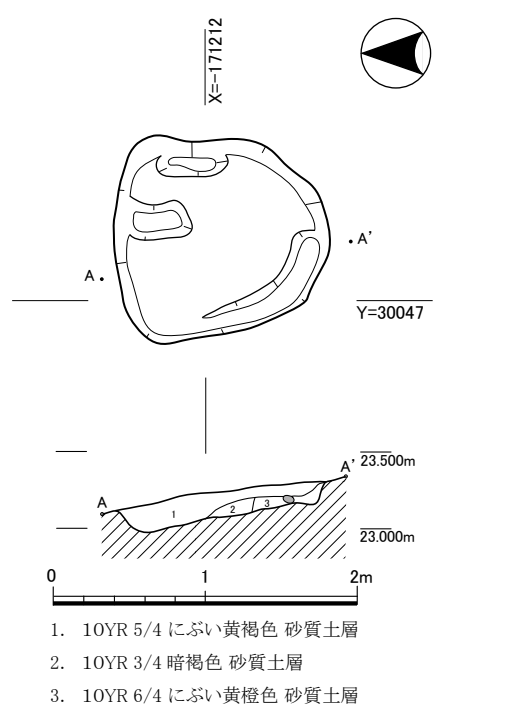
調査区の中央東側、溝 SD4 の南肩（F・H 区）に位置する土坑で、SD4 との前後関係は不明である。溝埋没時にほぼ同時に埋まったものと考えられる。長軸 1.2 m、短軸 0.9 m の平面形態が楕円形を呈しており、SD4 の肩から測ると深さは 30 cm となる。遺物は、土師質土器皿、鉄釘が出土している。

SK 3（第 13 図 図版 8－3）

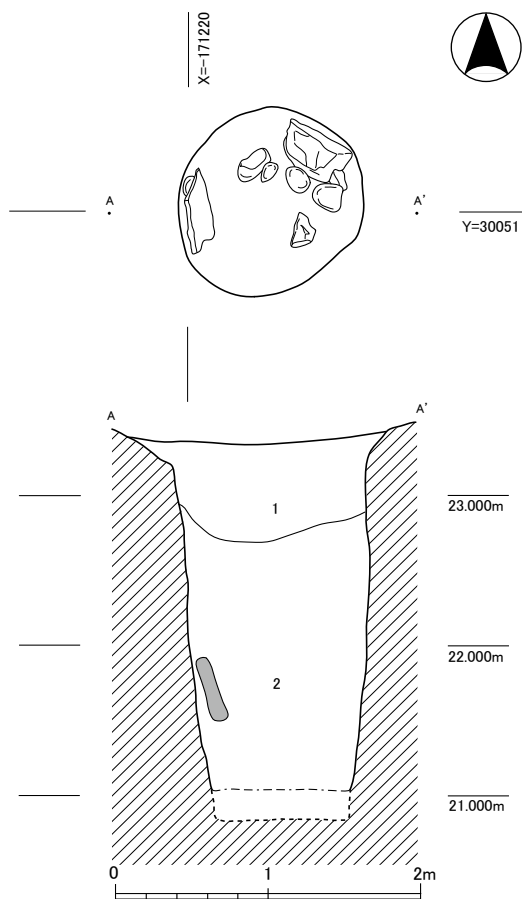
調査区の北端（A 区）に位置する、一辺が 1.6



第 12 図 SK1 平面図、土層断面図（S=1/30）



第 13 図 SK3 平面図、土層断面図（S= 1/50）



1. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土層（炭化物が少し混じる）

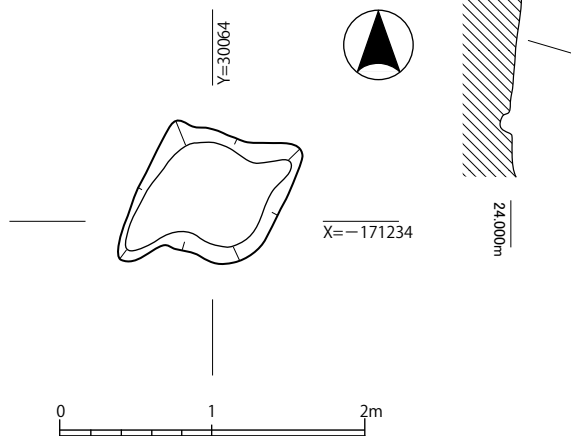
2. 10YR7/2 にぶい黄褐色砂質土層

（きめが細かく、ややも固く、炭化物が少し混じる）

第 14 図 SK4 石出土状況図、

土層断面図（S=1/50）

それより下の層からは遺物は出土せず、50cm 大の 2 個の板状石材や川原石などが上から放り込まれた状態で出土した。本遺構は形状からすれば井戸と考えられるが、水が湧き出すほどの深さはなく、地山は花崗岩



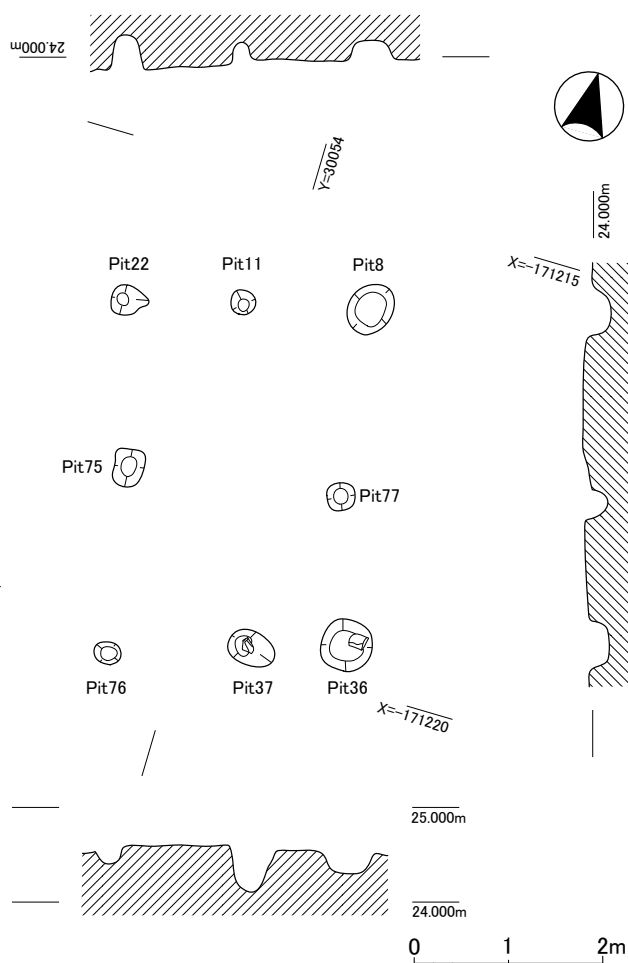
第 15 図 SK5 平面図（S=1/50）

▲ m 四方の平面形態が隅丸方形を呈する土坑である。深さは 20cm を測る。遺物は、備前焼甕、雁股形の鉄鏃、鉄釘が出土している。

SK 4（第 14 図）

調査区のやや南側（C 区中心）に位置する土坑で、掘り方は 2 段になっており長軸 4 m、短軸 3 m の平面形態が長楕円形を呈している。掘り方の上段部分は南側が SX3 の一部に削られている。遺構の前後関係を見ると、掘立柱建物 SB1 や柵列 SA2 よりも前に掘削されたものと考えられる。下段は長軸 2 m、短軸 1.7m の平面形態が楕円形を呈しており、深さは 2.15m まで掘削したところで、調査の安全を考慮して、最終的底面まで人力による掘り下げは断念した。調査終了後、重機掘削により断ち割りを行い、底面を確認したところ、掘り下げを断念した 20cm 下で底を確認した。

上層からは備前焼甕、鉄鏃、鉄釘が出土したが、



第 16 図 SB1 平面図、断面図（S= 1/80）

の風化した砂質土層で保水機能が乏しく、水を溜めるためのものとも考えがたい遺構である。

調査期間中、降雨により水が遺構面に溜まることがあっても翌日には水が地山へと浸透している状態であった。よってこの遺構は井戸としてではなく、土坑として報告しておく。このような井戸としての形状を有していながらその機能を活かしていない遺構は、東広島市の薬師城跡(SE2)にもその類例が認められる。

SK 5 (第 15 図)

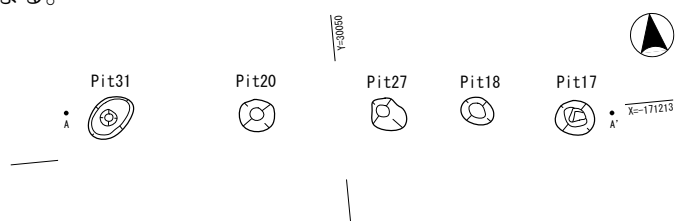
調査区東側 (I 区) の溝 SD1 の北肩上に位置している。長軸 1 m、短軸 0.9m の平面形態が方形を呈する深さ 19cm の土坑である。SD1 との先後関係では SK5 が新しい。遺物は土師質土器皿、銅製飾金具が出土している。

掘立柱建物

SB 1 (第 16 図 図版 5-3)

調査区中央やや北側 (D 区) に位置しており、北側には柵列 SA1、南側には柵列 SA 2、西側には SK4 があり、SK1 と重複している。この掘立柱建物は 8 つの柱穴 (Pit 8・11・22・75・76・37・36・77) で構成されている。柱穴は平面形態が直径 30～60cm の不整形な円形を呈している。柱間は 2 間×2 間で、桁行 3.8m、梁行 2.4m の建物である。各柱間の間隔は、Pit 8-11・Pit11-22 は 1.2m、Pit22-75 は 1.8m、Pit75-76 は 2 m、Pit76-37 は 1.4m、Pit37-36 は 1 m、Pit36-77 は 1.6m、Pit77- 8 は 2 m となる。

遺物としては、Pit37 からのみ土師質土器皿の破片が出土している。

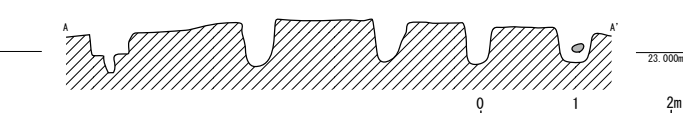


第 17 図 SA1 平面図、断面図 (S=1/80)

柵列

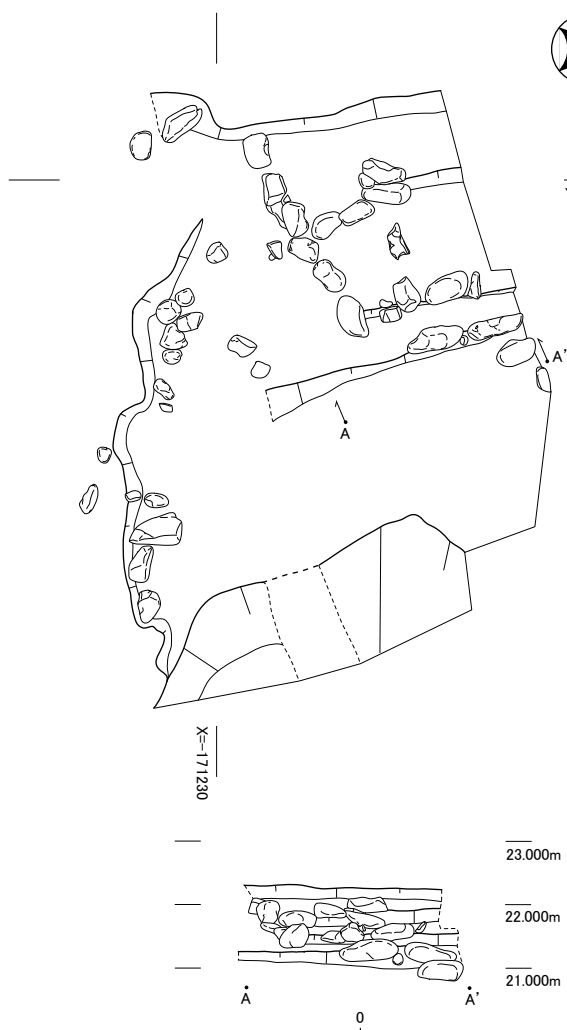
SA 1 (第 17 図)

調査区北側 (A・B 区) に位置しており、ほぼ南北方向に延びる柵列である。この柵は 5 つの Pit で構成されており、南から Pit31・Pit20・Pit27・Pit18・Pit17 という順に並んでいる。Pit の平面形態は直径が約 40cm の不整形な円形を呈しており、深さもほぼ 22.800～22.900m の高さで揃っている。それぞれの穴の間隔は、Pit31-20 は 1.5m、Pit20-27 は 1.4m、Pit27-18 は 1 m、Pit18-17 は 1m である。

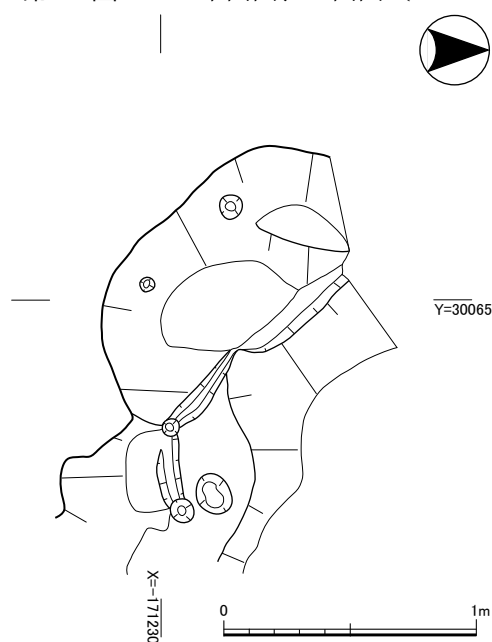


第 18 図 SA2 平面図、断面図 (S= 1/80)

この柵列が太田川に面する第 2 郭平坦面の最も北側に位置しているため、区画をするためのものではなく



第19図 SX1 平面図、立面図 (S= 1 / 30)



第20図 SX1 下層平面図 (S= 1 / 30)

○ 防御的な機能を有したものであると考えられる。いずれの Pit から遺物は出土しなかった。

Y=30065 SA2 (第18図)

調査区の中央やや北側 (E・F区)、掘立柱建物 SB1 と溝 SD4 の間に位置している柵列で、SD4 と SB1 の向きとほぼ平行となる南東から北西方向に延びている。この柵は4つの Pit で構成されており、南から Pit51・Pit74・Pit73・Pit39 の順で並んでいる。Pit の平面形態は直径が約 40cm の不整形な円形を呈しており、穴の深さは 23.400 ~ 23.500m の高さで揃っている。それぞれの穴の間隔は、Pit51-74 は 1.4m、Pit74-73 は 1.4m、Pit73-39 は 1.8m である。この柵列は、位置関係から溝 SD3 と同様に第2郭を区画するために設けられたものと考えられる。いずれの Pit から遺物は出土しなかった。

階段状遺構

SX 1 (第19図、図版4-2、7-2・3)

調査区の東側 (H・I区)、基壇状遺構 SX4 の北東の第3郭に位置している。北東から南西方向へと上がっていく階段状の遺構で、3つの段から成っており、段の角は川原石を1段もしくは2段、列状に積んでいる。検出できた階段の石列幅は低いほうから、1段目が 0.95m、2段目が 1.15m、3段目が 1m となり、東側の石列は 1.8m を測る。下面平地から1段目までの高さ (階段の高さ = 蹴上げ) は 11 ~ 20cm で、2段目は 10 ~ 18cm、3段目は 10 ~ 22cm、3段目から上面平地までは 8 ~ 10cm の高さとなる。下面平地から上面平地までの比高差は約 60cm で傾斜角は 17° となる。階段を上がりきった先は第2郭の 50° の斜面が迫っており、階段の向きそのままに上へと登っていくことは困難

である。階段の南側石列が上面平地の手前で2石ほど南西側へ曲がっているため、通路としては階段を登った後に南西側へと曲がっていく道順が考えられる。

階段の下部は 90 度北東側に折れ曲がり調査区外に続いている可能性も考えられたが、この先はすでに大きく削平され調査前から地山が露出していたため、確認するには至らなかった。

調査当初は階段が第 1 郭に位置する基壇状遺構 SX4 に向かって位置していたため、同じ時期の遺構かと思われたが、基壇状遺構が山城期の遺構を改変して造られたものであるのに対し、階段状遺構は第 2 郭の 50°の急斜面を改変することなく、その斜面の裾を沿わせる形で通路を設定していることから、それぞれは別の時期のものであると判断した。

山城において階段状遺構は、広島市佐伯区五日市町の今市城跡で確認されており、類似した遺構として、広島市安佐南区沼田町に位置する国重城跡の石段状遺構があるが、築城時のものと考えられる地山形成面から約 70cm 上方に位置しているため山城に伴う遺構とはなっていない。

遺物は、中世の備前焼甕・播鉢、土師質土器皿、亀山焼甕、東播系須恵器、鉄釘、古墳時代の須恵器が出土している。

SX 1 下層（第 20 図、図版 7－3）

この遺構は SX1 の真下に位置する遺構で、ところどころに段を有する落ち込みである。この落ち込みは、階段状遺構を造るために造成・整地されたもので、本調査区内で量も種類も最も遺物が出土した遺構でもある。

この整地土中には、遺物の他にも他の遺構で見られた 20 ～ 30cm 大の川原石が約 60 個ほど検出された。どの石にも出土状況に規則性が認められないことから、乱雑に放り込まれたものと考えられる。

遺物は、中世の備前焼甕・播鉢、土師質土器皿、亀山焼甕、東播系須恵器甕・鉢、鉄釘、鉄鎌、U 字状金具、古墳時代の須恵器器台・壺、土師器が出土している。

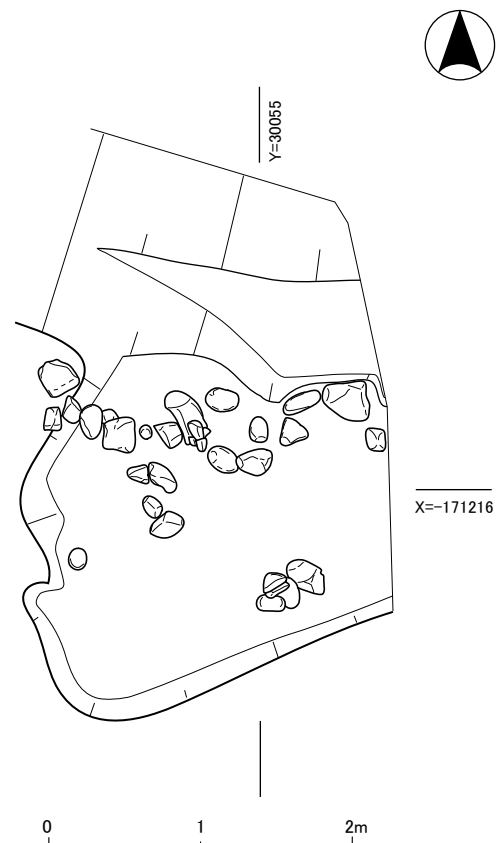
落ち込み状遺構

SX2（第 21 図 図版 9－2）

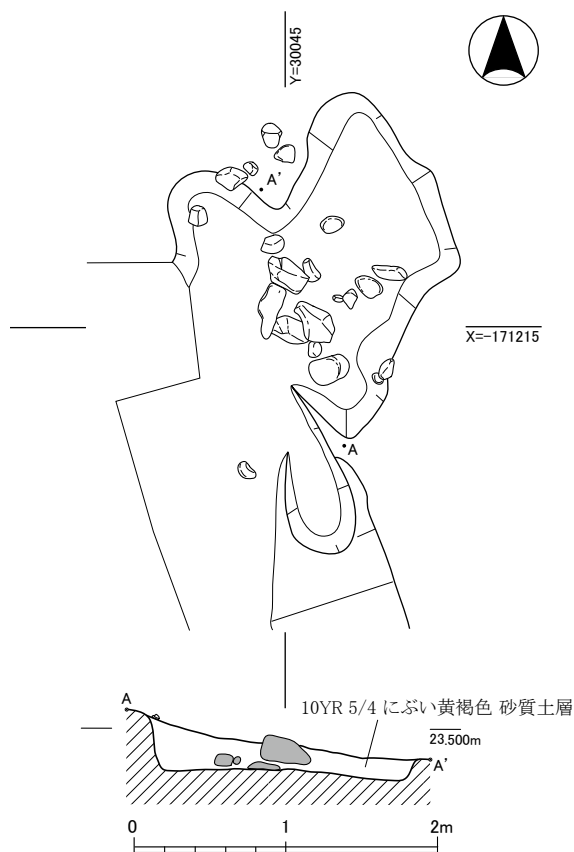
調査区北東端（B・D 区）に位置しており、検出幅 2.5m、深さ 30cm の緩い傾斜の段を有する遺構である。埋土中には川原石が約 30 個ほど入っており、一部は落ち込みの傾斜変換点付近で列をなしているかのように見受けられたが、そのほとんどの石が単独で、石同士で組み合わせられることもなかった。この遺構の性格は不明である。遺物は、鉄鎌、鉄釘、銅銭「天元通寶」が出土している。

SX3（第 22 図）

調査区北西（A・C 区）に位置し、浅い箇所 12cm、深い箇所 40cm の深さがある落ち込み状の遺構である。この遺構も SX2



第 21 図 SX2 平面図 (S=1/50)



第 22 図 SX3 平面図、土層断面図 (S= 1/50)

と同様に川原石や角石などが約 20 個入っていたが、SX2 よりも乱雑な状況であった。この遺構の性格も不明である。遺物は土師質土器皿、備前焼播鉢、鉄釘が出土している。

その他の遺構

幾志山城跡において、最も多く検出できた遺構に Pit がある。建物や柵として復元できたものの他に約 100 ほどの Pit を確認した。

第 2 郭においては、掘立柱建物 SB1 や直線的に配された柵 SA1・2 が復元できた遺構で、その他の Pit に関しては位置付けが困難であった。それぞれの Pit がどのような性格のものかは、陣幕を張るための穴や不規則に並ぶ柵跡など積極的に評価する見方もあるが、第 2 郭の全体像が明確でなかったため、平坦面が最も広い第 2 郭をこれ以上に区画したり、建造物を復元することに関しては差し控えたい。ただし第 2 郭においては他の郭と比べ多くの Pit が確認できたということで何

かしら人の手がかけられているという点で評価できる。このような遺構に関しては、今後も広く意見をいただき、より良い遺構の解釈、遺跡景観の復原に貢献していきたい。

以下は、数多く検出した Pit の中で遺物が出土したものに限り述べる。

Pit 6 (第 8 図 図版 9-3)

調査区北側 (D 区) SX2 の南側に位置している Pit である。直径 40cm で平面形態が円形を呈している。深さは 32cm である。この遺構からは土師質土器皿の破片、銅銭「紹聖元寶」が出土している。

Pit35 (第 8 図)

調査区中央北側 (F 区)、SB1 北西隅の柱穴の北に隣接する Pit である。長軸 70cm、短軸 30cm の平面形態が楕円形を呈している。深さは 31cm である。この遺構からは、土師質土器皿の破片、瓦質土器の甕の口縁部分が出土している。

Pit54 (第 8 図 図版 9-4)

調査区中央南側 (G 区) SD 4 の北に位置する Pit である。長軸 45cm、短軸 35cm の平面形態が楕円形を呈している。深さは 27cm である。この遺構からは、瀬戸焼のおろし皿が出土している。

Pit71 (第 8 図)

調査区北側 (C 区) SK5 の北に位置する Pit である。長軸 45cm、短軸 30cm の平面形態が楕円形を呈している。深さは 26cm である。この遺構からは、土師質土器皿、銅銭「皇宋通寶」が出土している。

3 出土遺物

遺物は大きく分けて近世・中世・古墳時代の3時代の遺物が出土している。そのほとんどが破片でコンテナで4箱分出土している。

近世の遺物は表土から出土している陶磁器、煙管で、遺構の時期を直接示す資料とはなりえないものである。中世の遺物は包含層および遺構から出土しており、土器は土師質土器皿・甕・釜、瓦質土器甕、備前焼播鉢・甕、瀬戸焼おろし皿・皿・碗、亀山焼甕、東播系須恵器鉢・甕、青磁碗、白磁碗が出土している。金属製品は、貨幣、鉄鏃、鉄鎌、鉄釘などが出土している。

現在、広島湾岸を含む安芸地域において中世の土師質土器の体系的な編年が確立していないため、土師質土器から年代を見出すのは困難である。そこで広域に流通し多くの出土例が認められる備前焼や亀山焼の編年をみると、本調査区内出土遺物は14世紀後葉から15世紀前葉の時期に相当するものと考えられる。

土師質土器においては本調査区内で出土している大半の土師質土器皿は糸切底で、1点のみではあるが回転ヘラ切り底の皿が土坑より出土している。この回転ヘラ切り底の皿は、中世では瀬戸内沿岸の備前・備中・備後において使用されたもので、それら地域から搬入されたものとして考えられている。

また、古墳時代の遺物としては包含層や階段状遺構SX1からは、5世紀後葉に比定できる須恵器や土師器が、SX4からは滑石製の管玉が1点出土している。これら遺物から、山城築城以前にはこの丘陵上には古墳が築かれていたと考えられる。この古墳を壊して造成をおこない、山城を造ったと推測される。調査区内においては、古墳時代の遺物が伴う石室や墓壇などの遺構は確認できなかったため、埋葬施設は、調査前にはすでに削平され無くなっていた第1郭の南側か、第2郭上に造られていた墳丘を伴うものであったと想定される。

時期が特定できない遺物としては、包含層や火葬墓付近から出土している基石や、火葬墓から焼骨とともに出土している土師質土器皿が挙げられる。火葬墓出土の土師質土器皿は、口径12.2cm、器高1.95cmの丸底の皿である。内外面の調整はヨコナデがされており、特に内面にはヨコナデの痕跡が強く残っている。器形と調整技法から畿内の土師皿の製作技法の影響を受けているものと考えられ、近隣地域には類例が乏しく、周辺調査においてもその類例が認められない点から、極めて在地的なものであるという捉え方もでき、その位置づけが難しい遺物である。類例資料の増加が望まれる遺物である。

個々の遺物については、第2～5表の遺物観察表を参照していただきたい。

第2表 遺物観察表 (土器)

出土位置	挿図	図版	種別	器種	法量			調整などの特徴	色調	備考
					口径	器高	底径			
SX1	第23図1	図版10-1	土師質土器	皿	(14.0)	3.0	(6.7)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	10YR6/6明黄褐色	
	第23図2	図版10-2	土師質土器	皿			(6.2)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	7.5YR7/6橙色	
	第23図3	図版10-3	土師質土器	皿			(6.3)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	10YR8/4浅黄褐色	
	第23図4	図版10-4	土師質土器	皿			(7.2)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	7.5YR8/3浅黄褐色	
	第23図5	図版10-5	土師質土器	皿	7.6	1.3	5.7	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	7.5YR7/6橙色	
	第23図13	図版10-13	備前焼	罎鉢				内外面:ヨコナデ 罎目9条1単位	5YR4/3にぶい赤褐色	14世紀後半～15世紀前半
	第23図14	図版10-14	備前焼	罎鉢				内外面:ヨコナデ 罎目7条残存	7.5YR6/4にぶい橙色	
	第23図16	図版10-16	備前焼	甕				外面:ヘラケズリ 付着物あり	7.5YR5/2灰褐色	
	第23図20	図版11-1	東播系須恵器	甕				内面:ヨコナデ 外面:底部付近ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	5Y6/1灰色	
	第23図21	図版11-2	東播系須恵器	鉢	(28.2)	10.8	(10.4)	内外面:ヨコナデ	2.5Y6/2灰黄色	
	第23図19	図版10-19	亀山焼	甕	頸部径(24.0)			内外面:ヨコナデ 外面:胴部格子目タタキ	5YR4/3にぶい赤褐色	
	第23図24	図版11-5	須恵器	短頸壺	(9.0)			内外面:ロクロナデ 外面:波状文	2.5Y7/1灰白色	
	第23図25	図版11-6	須恵器	器台		(15.7)	(17.6)	内外面:ロクロナデ 外面:波状文 3段8方透かし	2.5Y6/2灰黄色	
	第23図8	図版10-8	土師質土器	皿			(6.6)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	10YR7/6明黄褐色	
SX3	第23図15	図版10-15	備前焼	罎鉢				内外面:ヨコナデ 罎目3条残存	5YR4/3にぶい赤褐色	14世紀後半～15世紀前半
SK1	第23図23	図版11-4	亀山焼	甕	(32.6)	(40.0)	(22.8)	内外面:ヨコナデ 外面:胴部格子目タタキ	5Y6/1灰色+2.5Y4/1黄灰色	
SK2	第23図6	図版10-6	土師質土器	皿	8.2	1.5	5.8	内外面:ヨコナデ 底面:ヘラ切底	10YR6/4にぶい黄褐色	
SK5	第23図7	図版10-7	土師質土器	皿			(7.8)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	10YR6/5にぶい黄褐色	
SD4	第23図9	図版10-9	土師質土器	皿			(6.8)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	7.5YR6/6橙色	
	第23図12	図版10-12	青磁	碗		高台1.0	6.9	内外面:釉 見込に花文	10Y5/2オリーブ灰色	
	第23図18	図版10-18	亀山焼	甕				内外面:ヨコナデ 胴部:格子目タタキ	2.5Y6/1黄灰色	
Pit35	第23図22	図版11-3	瓦質土器	甕	(20.1)			内外面:ヨコナデ 頸部:竹管文	2.5Y7/4浅黄色	15世紀初め頃か
Pit54	第23図17	図版10-17	瀬戸焼	おろし皿	11.5	2.5	4.6	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底 見込:ヘラにより罎目	7.5Y6/3オリーブ黄色	
Pit71	第23図10	図版10-10	土師質土器	皿			(8.4)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	10YR6/6明黄褐色	
ST1	第23図11	図版10-11	土師質土器	皿	12.2	1.95		内外面:ヨコナデ 内面に強いナデ痕跡	2.5Y7/2灰黄色	京都系土師皿か
A区Pit	第26図1	図版12-1	瀬戸焼	碗	(17.2)			内外面:釉	5Y6/3オリーブ黄色	
A区包含層	第26図2	図版12-2	瀬戸焼	皿	(17.4)			内面:釉 外面:露胎	5Y7/3浅黄色	
A区包含層	第26図7	図版12-8	土師質土器	釜				内外面:ヨコナデ 把手部:ユビオサエ	2.5Y6/3にぶい黄色	14世紀代
A区包含層	第26図13	図版12-14	須恵器	高坏蓋	(11.9)			天井部:回転ヘラケズリ 内外面:ロクロナデ	2.5Y5/1黄灰色	
C区包含層	第26図4	図版12-4	白磁	碗				内外面:釉	5Y7/2灰白色	
F区包含層	第26図3	図版12-3	土師質土器	皿	(13.2)	3.6	(6.4)	内外面:ヨコナデ 底面:糸切底	2.5Y7/3浅黄色	
F区包含層	第26図5	図版12-5	青磁	碗				内外面:釉	5GY明オリーブ灰色	
F区包含層	第26図12	図版12-13	土師器	高坏		脚8.2	(7.4)	外面:ケズリ、ヨコナデ 内面:ヘラ状工具によるシボリ痕跡	10YR7/4にぶい黄褐色	
G区包含層	第26図8	図版12-6	土師質土器	甕			(8.6)	底部付近:ユビオサエ	10YR7/4にぶい黄褐色	
G区包含層	第26図11	図版12-10	亀山焼	甕	(20.8)			内外面:ヨコナデ 胴部:格子目タタキ	2.5Y6/4にぶい黄色	
H区包含層	第26図6	図版12-7	備前焼	甕				内外面:ヨコナデ	5YR5/3にぶい赤褐色	
H区表土	第26図9	図版12-9	亀山焼	甕				内面:ヨコナデ 胴部:格子目タタキ 底部付近:ユビオサエ	7.5Y5/1灰色	14世紀後半～15世紀前半
H区表土	第26図14	図版12-15	須恵器	甕	(36.6)			内外面:ロクロナデ 外面:波状文	10YR5/1褐灰色	
出土位置	挿図	図版	種別	周縁幅	周縁高	厚さ				
H区表土	第26図10	図版12-12	軒先丸瓦	2.2	0.5	2.1				

〔法量の単位はcm〕

第3表 遺物観察表（金属製品）

出土位置	挿図	図版	種別	法量			備考
				長さ	幅	厚さ	
SX1	第24図10	図版11-16	鉄釘	4.2	0.5	0.45	
	第24図11	図版11-17	鉄釘	7.3	1	0.7	
SX1下層	第24図13	図版11-19	鉄釘	9.2	0.55	0.5	
	第24図14	図版11-21	鉄釘	5.7	0.6	0.4	
	第24図19	図版11-31	鉄鎌	全長31.0 刃部11.0 基部1.0	刃部0.8~ 2.8	刃部0.2~0.4 基部0.3	
	第24図28	図版11-29	U字状金具	3.0	1.7	0.2~0.3	
	第24図15	図版11-22	鉄釘	3.1	0.45	0.45	
SX2	第24図20	図版11-34	鉄鎌	7.1	0.45	0.5	基部のみ
	第24図12	図版11-18	鉄釘	4.9	0.6	0.6	
SX3	第24図16	図版11-20	鉄釘	6.8	0.4~0.7	0.4~0.65	
	第24図17	図版11-23	鉄釘	10.2	0.7~1.0	0.7~0.8	
	第24図4	図版11-10	鉄釘	7.4	0.7~1.2	0.7	
SK1	第24図5	図版11-11	鉄釘	2.5	0.45	0.45	
	第24図6	図版11-13	鉄釘	5.8	0.6~0.8	0.65	
	第24図9	図版11-15	鉄釘	4.4	0.5	0.4	
	第24図18	図版11-30	鉄鎌	19.6	2.0~3.0	0.1~0.6	
	第24図7	図版11-12	鉄釘	4.2	0.6	0.4	
SK2	第24図3	図版11-8	鉄鎌	全長16.5 刃部5.9 頸部11.5	刃部5.0 基部0.5	刃部0.2 基部0.3~0.5	雁股型
SK4	第24図2	図版11-9	鉄鎌	3.5	0.7	0.6	基部のみ
	第24図8	図版11-14	鉄釘	3.4	0.7	0.6	
SK5	第24図29	図版11-35	銅製飾金具	8.7	1.6	0.2	
SD4	第24図1	図版11-7	鉄鎌	全長13.3 刃部8.3 基部4.2	刃部0.7 基部0.6	刃部0.3~0.7 基部0.5	鑿頭型
Pit9	第24図21	図版11-24	鉄釘	3.1	0.5	0.3	
Pit19	第24図22	図版11-25	鉄釘	3.3	0.3	0.3	
	第24図23	図版11-26	鉄釘	4.0	0.4	0.3	
Pit24	第24図24	図版11-32	鉄釘	5.6	0.4	0.4	
Pit54	第24図25	図版11-27	鉄釘	2.65	0.45	0.3	
Pit72	第24図26	図版11-28	鉄釘	5.2	0.4	0.4	
	第24図27	図版11-33	鉄釘	7.0	0.5	0.55	
C区包含層	第24図46	図版11-36	銅製キセル	5.9	0.9~0.95	0.05	雁首部

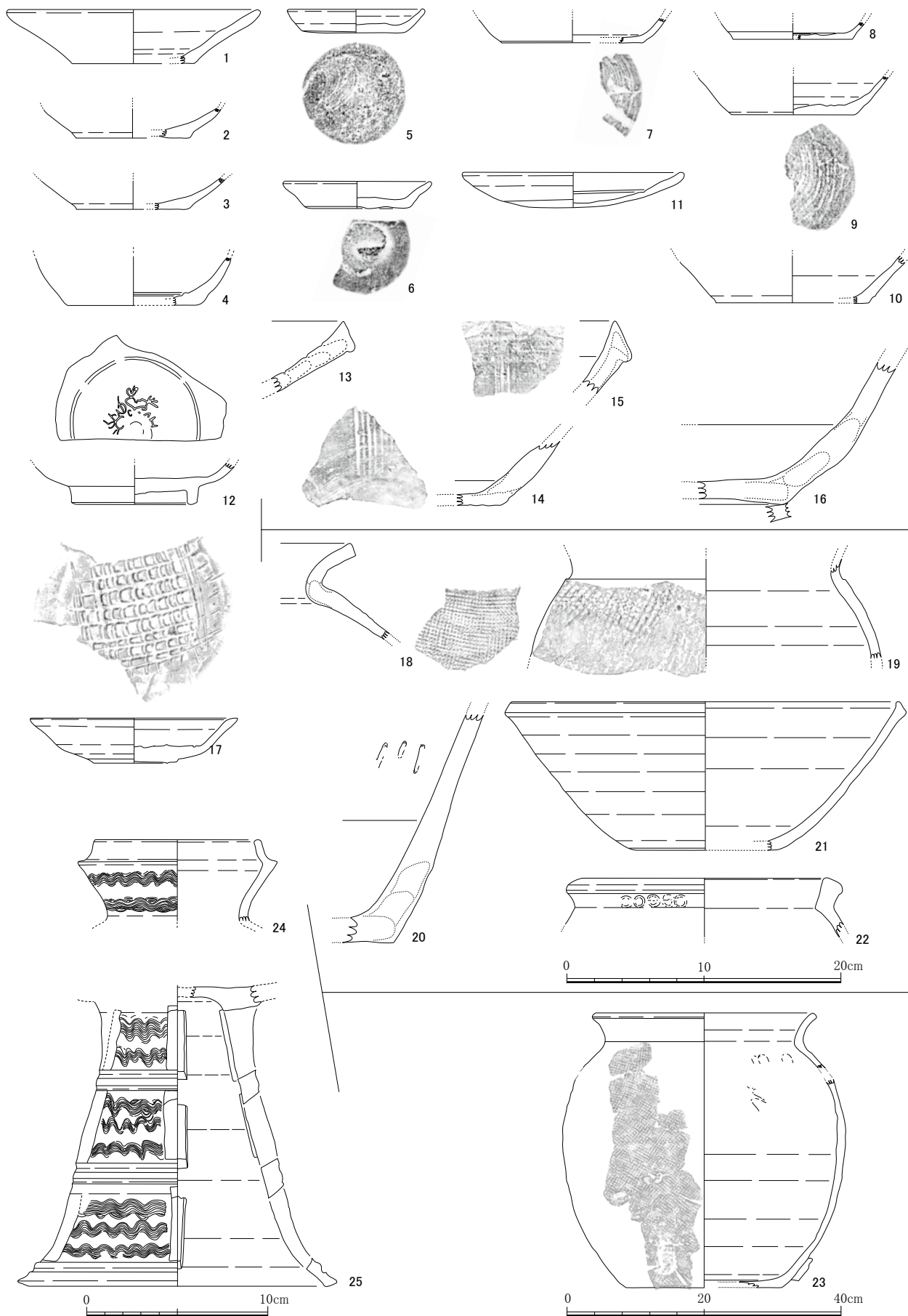
第4表 遺物観察表（貨幣）

出土位置	挿図	図版	種別	銘	字体	初鑄地・年	径	備考
SX2	第25図8	図版12-23	銅銭	天聖元寶	真書体	北宋 1023	2.4	
Pit76	第25図9	図版12-24	銅銭	皇宋通寶	真書体	北宋 1038	2.4	
Pit6	第25図10	図版12-25	銅銭	紹聖元寶	行書体	北宋 1094	2.4	
F区包含層	第25図11	図版12-26	銅銭	元符通寶	行書体	北宋 1098	2.3	
F区包含層	第25図12	図版12-27	銅銭	聖宋元寶	行書体	北宋 1101	2.4	
G・H区包含層	第25図13	図版12-28	鉄銭				2.4	

第5表 遺物観察表（石製品）

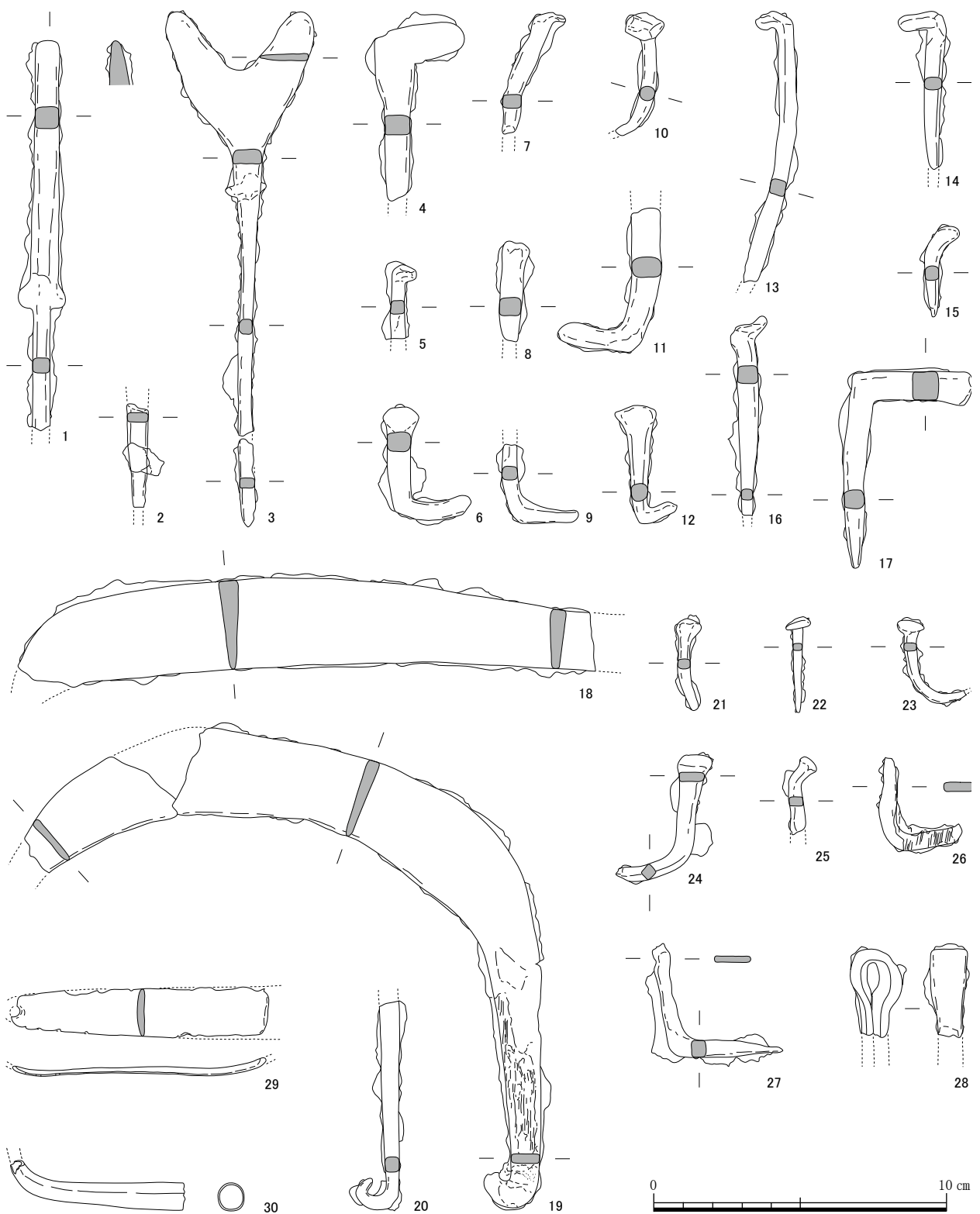
出土位置	挿図	図版	種別	法量			色調	備考
				長さ	幅	厚さ		
B区火葬墓周り	第25図1	図版12-17	基石	1.4	1.3	0.4	7.5Y5/1灰色	
C区包含層	第25図2	図版12-18	基石	1.6	1.45	0.45	10Y5/1灰色	
E区包含層	第25図3	図版12-19	基石	1.5	1.35	0.5	10Y6/1灰色	
F区包含層	第25図4	図版12-20	基石	1.4	1.2	0.5	7.5Y4/1灰色	
H区包含層	第25図5	図版12-21	基石	1.4	1.1	0.5	N2/黒色	
H区包含層	第25図6	図版12-22	基石	1.5	1.2	0.5	N2/黒色	
SX4	第25図7	図版12-16	管玉	1.25	0.6~0.65	0.6	10Y7/2灰白色	滑石製 孔の径0.35~0.4cm

〔法量の単位はcm〕

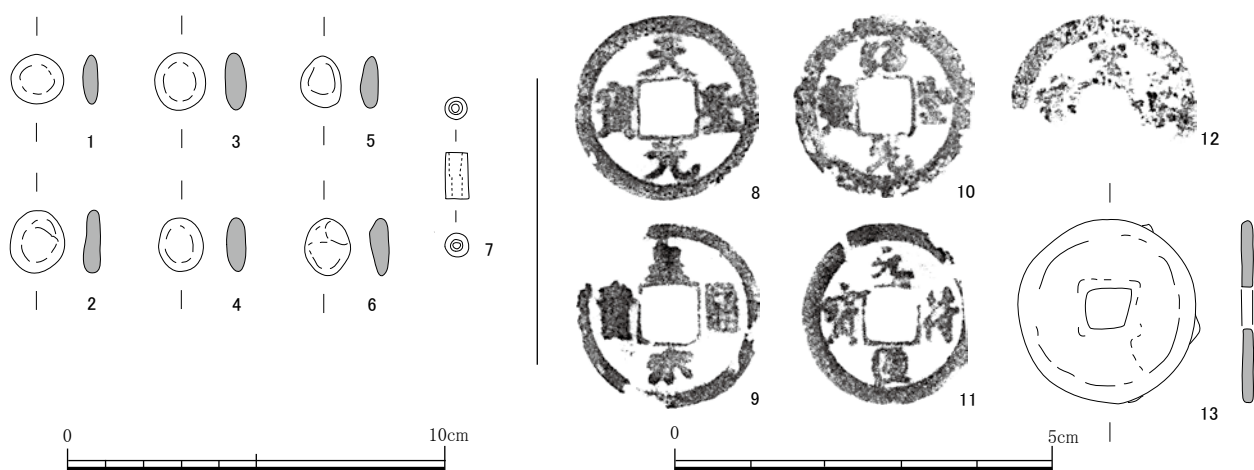


第23図 出土遺物実測図①

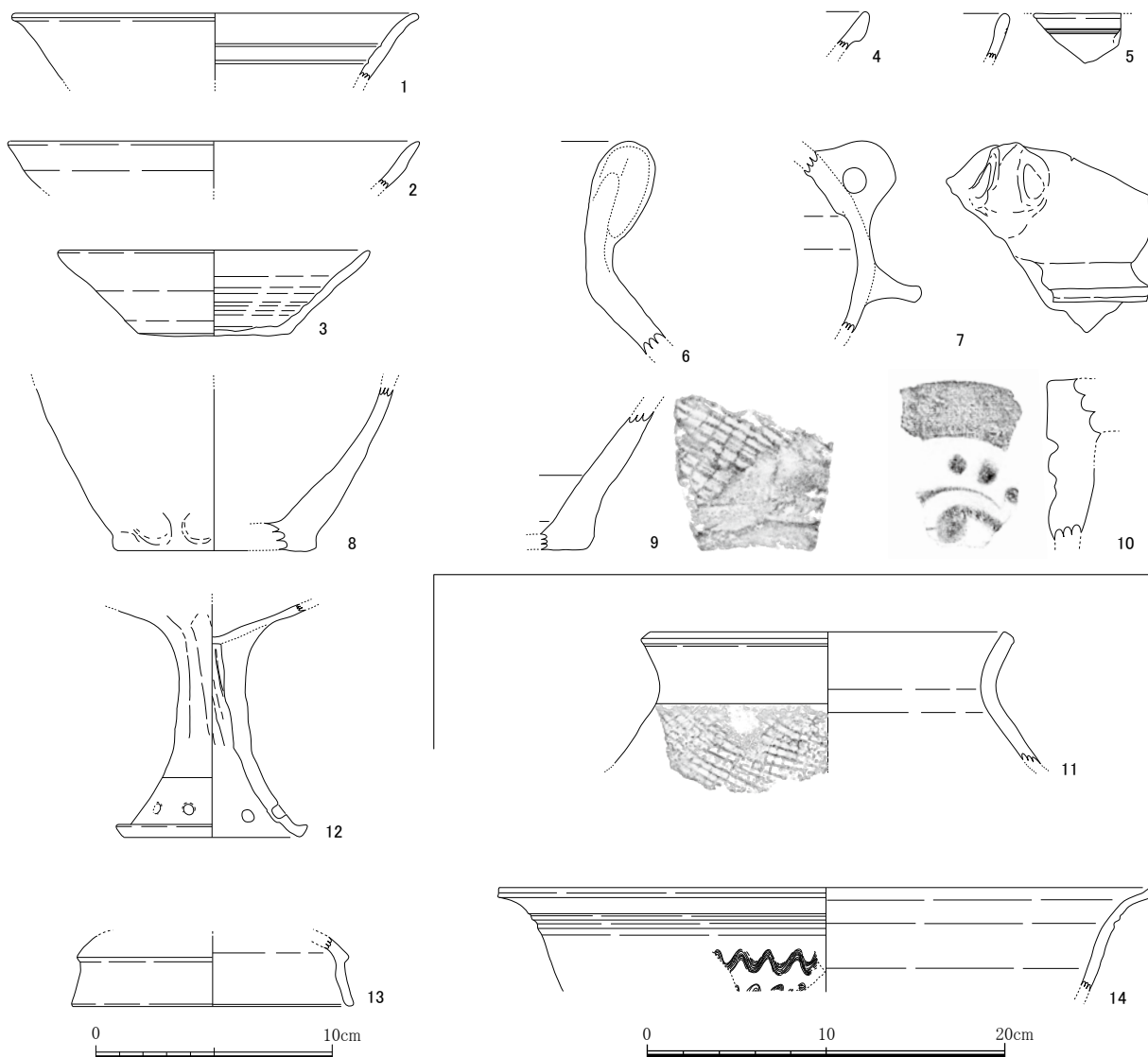
(1~17・24・25 S= 1/3、18~22 S= 1/4、23 S= 1/16)



第 24 図 出土遺物実測図② (S= 1 / 2)



第 25 図 石製品・銭貨実測図 (1~7 S= 1/ 2、8~13 S= 1/ 1)



第 26 図 表土・包含層出土遺物実測図 (S= 1/ 3)

V まとめ

この度の幾志山城跡の発掘調査では山城の遺構として第1～3の郭を確認し、それぞれの郭にある遺構を確認することができた。調査成果を基に概要を述べてみる。

第1郭は後世の削平により、その大半が失われてしまっていたが、戦後撮影された空中写真で見る幾志山城跡の木々の位置や、郭の斜面の延長線上を想定すると南及び南西方向へその中心がくることが想定される。第1郭を挟むように第2郭・第3郭も周りを巡ることが想定できるため、幾志山城は北西―南東方向に細長い縄張りの城であると考えられる。特に第3郭は平坦面の面積が狭いため、第2郭の周りに位置する犬走りとして位置付けられる。

第2郭の北西側はとても視界が開けており、北西から南側まで広く見渡すことができ、第2図及び第2表の2―白山城跡、3―中野城跡、4―銀山城跡、5―尾首城跡、6―小田狐山城までが目視できる。幾志山城は日常の生活面から山城の郭までの比高差が12mほどで、他の山城と比較すると極めて生活面に近い位置にあり、展望が良く次の行動が取りやすい反面、周囲からの攻撃に対して防御という面では弱いと立地上では言える。

また、丘陵周囲の削平のために竪堀等の防御面の遺構を確認することはできなかったが、郭の外周に土塁などの構造物が築かれなかったという点、より急峻な斜面や平坦面を増やすために造られる切岸などの遺構が確認できなかったという点、幾志山城が他の山城と比べ生活面との比高差がとても小さいという点を合わせて考えてみると、築城当初から戦鬪に重点をおいた防御面に関する要素には重きを置かず、周辺の監視に重きを置いたものと考えられる。

第3郭に位置する階段状遺構(SX1)の状況と、第2郭と比べ第3郭においては遺構数が極端に少ないことを考慮すると、第3郭の方面には柵などの防御的な施設を置く必要性がなかった可能性が考えられる。この状況を積極的に評価すると城の出入口は東側に位置していたと想定でき、この幾志山城と関係のある施設(居館や集落など)もこの付近にあったのではないかと推測される。14・15世紀に太田川がどのような様相をしていたかは不明であるが、現状と大差のない状況であったならば、有事の際に迅速な対応するための船溜まりや船着場などの施設も城の北東から北側(弘住神社〔小田村八幡宮〕)周辺ぐらいまでに配されていたと想定される。

以上の要素を合わせてみると、幾志山城跡の丘陵は1,200㎡で、単純な郭の配置しか認められないという点から、機能的には「砦」(註1)に位置づけられると考えられる。城として機能していたと考えられる時期は出土遺物の年代から14世紀後半～15世紀前半の時期が推測される。

幾志山城の築城主体は史料などが残されていないため、具体的な名前を挙げることはできないが、瀬戸内海に直結している太田川東岸に位置し、太田川河口付近から対岸に位置する銀山城のふもと一帯をその眼下に入れることのできる要所に位置している点から、河川を中心とした水運などの交通を掌握することのできた国人と想定される。

幾志山城から望むことのできる上記の山城で発掘調査実施されているのは白山城と尾首城と小田狐城があり、白山城と尾首城は15世紀の山城として位置付けられていることから幾志山城と同時代に機能していたものと考えられる。

幾志山城が機能していたと考えられる時期、史料によると以下のことが起きている。

応安四年(1371)安芸国守護職が武田氏から今川了俊に移る。武田氏は地位がこの一時期失われた間に、周辺の国衙領を押領するなどして自己の勢力を拡充している。

康安元年（1389）11月の将軍家御教書には、安芸国国衙領内の佐東郡原郷・安南郡新勅旨田・^{そま}杣村・八木村・温品などを、武田治部少輔・武田遠江守・品河近江入道・香河修理亮・香河大蔵少輔・金子大炊助などが押領しているのを止めるように命じている。武田治部少輔は原郷、武田遠江守は杣村、品河近江入道は緑井郷、香河修理亮・大蔵少輔は八木村、金子大炊助は温品にそれぞれ本拠をもつ領主であるにもかかわらず、室町幕府によって認められている従来の権限に充足することなく、それぞれの所領において年貢押妨をおこない、さらにその地の支配者にのし上がろうとしている。この頃に武田氏は、上記の各氏を統率下において勢力を拡大していったものと考えられている。応永十年（1403）国内のこの混乱に対し、室町幕府は厳しい態度で臨むことを決し、山名満氏を守護に任じた。翌年には国人に対し、不当に手にした所領の整理を行う目的で所領知行の由緒の差し出しを求めている。

応永十年（1403）九月には、これに対抗し、安芸国人三十三名（毛利・天野・熊谷・平賀・香河・金子・品河・温品氏など）は一味同心して本領を守り、相互に援助することを申し合わせており、守護と国人衆という対立の構図が明確となっている。

応永十九年（1412）頃、山名氏の後に、武田信守（第3代銀山城城主）が安芸国守護となり、勢力を広げようとしている。

以上のように、小地域ごとの小競り合いや勢力拡大に始まり、その動きが徐々に拡大していき、幕府と在地勢力の対立といった動きが見られるような時代である。そのような時代の中、幾志山城は築城され、より大規模な戦闘がおこなわれる戦国時代にはその防御機能の低さから廃棄されたものとして捉えておきたい。

本調査をもってこの幾志山城跡は開発により消滅してしまうことになったが、調査委託者並びに関係各位のご協力により、当該地域において新しい知見が得ることができた。今後、幾志山城並びに本成果が、この地域で生活される方々の記憶に永く留められることを期待したい。

註1：小都氏の分類によると砦とは「小規模・単郭で防御機能は弱く、生活感のない臨時施設である。集落裏山の低丘陵・丘陵に立地する。14・15世紀を中心に16世紀前半まで見られるが16世紀後半には見られなくなる。小規模城に類似するが、規模は極小規模で単郭のものが多く、堀切や柵の他には防御施設はなく、施設はあっても小掘立柱建物が1棟だけの場合が多い。出土遺物はほとんどみられず、生活感がない点で小規模城とは基本的に性格が異なるが、反面、その立地からは集落との関係性が強い。」という位置づけを行っている。

参考文献

- 小都隆 2005 『中世城館跡の考古学的研究』
- 鍛冶益生・鈴木康之他 2004 『寺山城跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第5集
- 古賀信幸 1999 「中国地方の京都系土師器皿 - 戦国期の資料を中心として -」
『中近世土器の基礎研究』XIV
- 山陰中世土器検討会編 2008 『山陰地方における備前焼』第7回山陰中世土器検討会資料集
- 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 篠原芳秀 1987 「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」『中近世土器の基礎研究』III
- 鈴木康之 1996 「遺物 1 土器類」『草戸千軒町遺跡調査報告書』V 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 高下洋一 2004 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』
財団法人広島市文化財団発掘調査報告書第9集
- 財団法人広島県埋蔵文化財センター編 1987 『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（IV）』
広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』
- 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』
- 永井久美男 2002 『新版中世出土銭の分類図版』
- 花本哲志 2000 「広島県内出土の亀山焼系甕について - 城館遺跡出土の未報告資料の紹介とともに -」
『研究輯録』X 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
- 広島県教育委員会編 1977 『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』
- 広島県教育委員会編 1984 『尾首城発掘調査報告』 - 広島県立祇園北高等学校建設にかかる -
- 広島県教育委員会編 1993 『広島県中世城館総合調査報告書』第1集
- 広島市教育委員会編 1982 『広島市安佐南区沼田町所在 国重城跡発掘調査報告』
広島市の文化財第19集
- 広島市役所編 1980 『高陽町史』
- 脇坂光彦・小都隆編 2008 『芸備』第35集（特集 出土遺物から見た芸備の城館跡）
- 渡辺昭人・松井和幸他 1996 『薬師城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第142集

附 論

広島県安佐北区幾志山城跡出土の火葬骨

* **
松下真実・松下孝幸

【キーワード】：広島県、中世～近世、火葬骨、第二頸椎

はじめに

広島県安佐北区口田南2丁目に所在する幾志山城跡の発掘調査が、住宅開発事業に伴って2008年（平成20年）におこなわれ、4箇所から火葬骨が検出された。人骨の検出状況から推測してこの4箇所の遺構は墓と考えられる。いずれも墓坑は小さく、平面形態は楕円形で、径、深さともに40cm程度である。

火葬骨は、火葬されていない人骨に比べて、資料的な価値に乏しいと思われがちであるが、残存部位によっては、性別や年齢を推測できる場合もある。火力が強くない場合は、計測も可能である。また、火葬骨の場合は残存量が少ないことが多いが、それは埋納される骨が選択されたからに他ならない。どの部位が埋葬されているかを確認しておくことは埋葬習俗の一端を明らかにするためにも必要である。このような観点から、筆者らは火葬骨も非火葬骨と同じように人類学的観察や考察をおこなっている（松下、2004）。

広島から出土した火葬骨の出土例や報告例は少なく、広島市の大明地遺跡（松下、1987）と巣取遺跡（松下、1997）、豊平町（現・北広島町）の地徳古墓（松下、1997）、東広島市の西本3・4号遺跡（松下、1999）、府中市の東楨木山第1古墳（松下、1999）、北広島町の中山（松下、2006）から出土した例があるにすぎない。その中で中世の火葬骨は地徳古墓のみで、大明地遺跡、巣取遺跡、西本3・4号遺跡からは近世の火葬骨が出土している。

本遺跡出土人骨の残存量はかなり少なく、その大きさも小さいものなので、骨種を同定できたものは少ない。また、検出された人骨には火を受けた時に生じる特有の亀裂が認められ、色も白色か灰色である。

今回出土した火葬骨について解剖学的、人類学的な観察をおこなったので、残存していた骨の種類やその特徴など記載しておきたい。

資 料

火葬骨は4基の遺構から4体分が検出された。残存量は表1に示すとおり少なかったが、中には骨種を特定できるものもある。検出された人骨を精査した結果、複数体混ざっているのではなく、それぞれ1基に1体分の人骨（量は少ない）が埋葬されていると考えても差し支えなさそうである。また、明らかに幼小児骨と思われるものは認められなかった。

*Masami MATSUSHITA、**Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

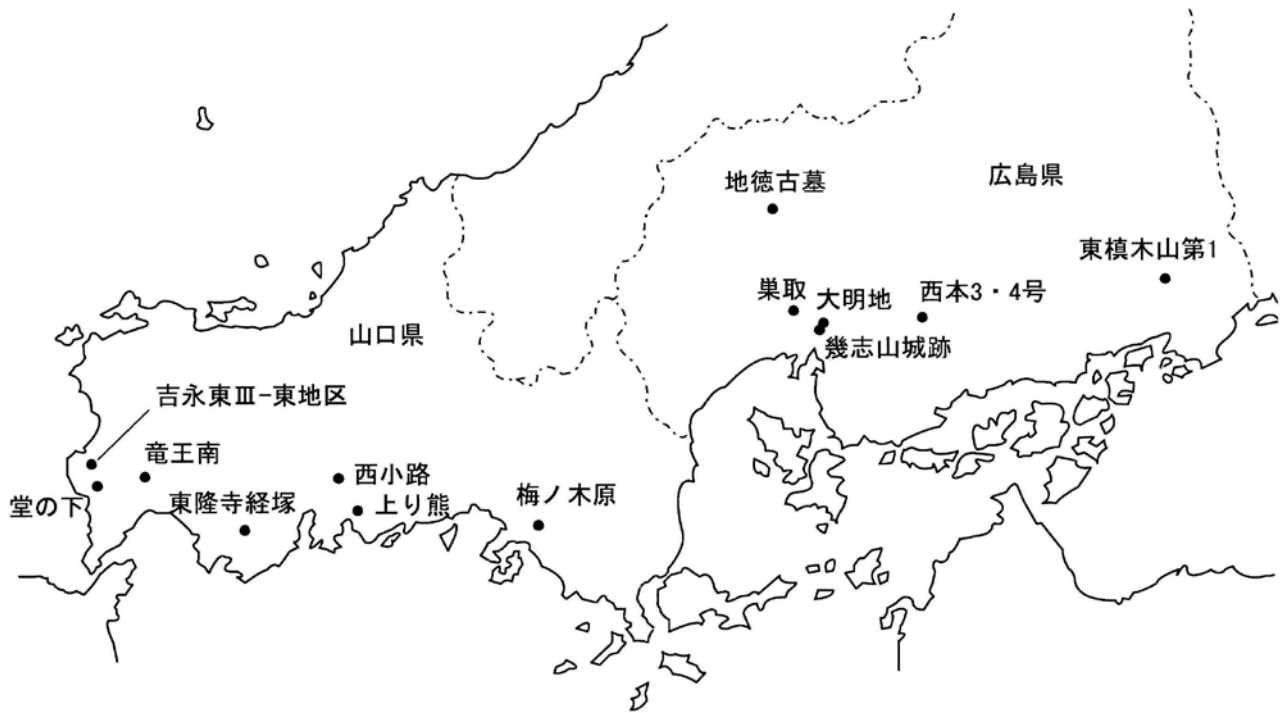


図1 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1 Location of the Kishiyamajo ruin,Hiroshima City,Hiroshima Prefecture)

本火葬骨の所属年代は、幾志山城の廃絶（14 世紀後葉～ 15 世紀前葉）以降から近世までの間と推測されているので、今のところ中・近世火葬骨と考えておきたい。今後遺物の考古学的研究が進めば、ある程度時期幅を絞り込むことができるものと期待される。この墓（遺構）からは鉄釘が出土していることから、火葬骨は木製の容器に収められていた可能性がある。

表 1 出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	重量	備 考
ST-1	男性	不明	88.8g	第二頸椎（軸椎）
ST-2	男性	不明	183.4g	第一頸椎（環椎）
Pit12	不明	不明	0.9g	
Pit15	不明	不明	30.3g	

所 見

ST-1（男性・年齢不明）

残存していたのは約 88.8g の火葬骨で、火を受けているため骨が著しく変形しているため骨種と部位の確認はきわめて困難であったが、大部分は四肢骨の小片である。頭蓋は確認できなかった。そのほか右膝蓋骨、左舟状骨および第二頸椎の一部を同定することができた（図 2）が、第二頸椎（軸椎）では、左側と思われる上関節面を確認できた。性別は膝蓋骨が大きいことから男性と推測したが、年齢は不明である。

ST-2（男性・年齢不明）

残存していたのは約 183.4g の火葬骨で、大部分は四肢骨の小片である。一部接合が可能であった。変形が著しく大部分の骨片については骨種の同定はできなかったが、左上腕骨、頭蓋、大腿骨、第一頸椎、仙骨の一部が認められた（図 2）。第一頸椎（環椎）は右側の外側塊が残っており、上下の関節窩を確認することができる。性別は、上腕骨が太く、大腿骨の粗線の発達が良好であることから男性と推定した。年齢は不明である。

Pit 12（性別・年齢不明）

残存量は 0.9g である。頭蓋骨の一部が認められたにすぎない。性別・年齢は不明である。

Pit 15（性別・年齢不明）

残存量はわずか 30.3g である。大部分は四肢骨の細片であるが、頭蓋骨の一部が認められた。性別・年齢は不明である。

考 察

本遺跡と同じ広島市内に存在する大明地遺跡では 4 箇所から 4 体分の火葬骨が検出されているが、いずれも頭蓋が含まれている。巣取遺跡からは 3 箇所から 4 体分の火葬骨が検出されており、やはり

4体とも頭蓋を伴っている。このように火葬骨の場合、たとえ拾骨される量が少なくても、その中にはかならず頭蓋は含まれていることから、遺骨のうち最も重要視されてきたのは頭蓋であることが推測される。

本遺跡でも4箇所の火葬骨のうち3箇所からは頭蓋片が検出されていることから、量は著しく少ないが、この3遺構は遺骨を埋葬した「墓」と考えてさしつかえないと思われる。ST-1では頭蓋を確認できなかったが、「のどぼとけ」と俗称される第二頸椎(軸椎)の一部が残存していた。骨の量が著しく少ないことを考えれば、偶然第二頸椎の一部が埋納されたとは考えにくいし、椎骨片はこの一片にすぎない。意識的に選択されたと考えるべきであろう。第二頸椎の一部が火葬地から拾骨され、埋納されていることから本遺構も「墓」と認識すべきであろう。ST-2では、第一頸椎の一部を確認した。この例でも椎骨片はこの第一頸椎片のみである。意識的に拾骨されたとみるべきであろうが、本例の場合は第二頸椎と見誤った可能性がある。第一頸椎と第二頸椎は三番目以降の頸椎と形態が大きく異なり、一番目と二番目は椎弓部分が比較的似ているために両者を誤認した可能性はある。

本遺跡と同じように、大明地遺跡でも1体(SK40号)に、また巣取遺跡でも1体(SK-4)の火葬骨の中に第二頸椎の一部が含まれていたことは注目しておきたい。

本遺跡では、すべての火葬骨で第二頸椎が見いだせなかったのはこの骨を必ず拾骨するという社会的通念もしくは宗教的規制がそれほど強くはなかったこと示しているのか、それとも第二頸椎を含めた遺骨が別の場所に埋葬されていると理解すべきなのかは、わからない。火葬骨の類例が多くなれば、考察を深めることができるものと期待される。

要 約

広島県安佐北区口田南二丁目に所在する幾志山城跡の発掘調査で、4基の遺構から火葬骨が検出された。残存量は少なく、ほとんどが細片状になっており、骨の同定はかなり困難であったが、接合できた骨もあり、同定できた骨もあった。人類学的に残存していた火葬骨を精査した結果は次のとおりである。

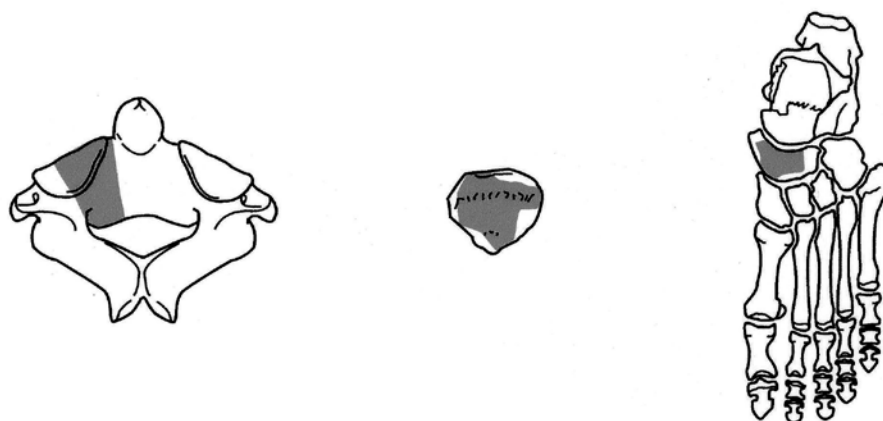
1. 4基の墓からそれぞれ1体分の成人の火葬骨が検出された。
2. 本火葬骨の所属年代は考古学的所見から、中・近世以降の人骨と推測されている。
3. 残存量はそれぞれ著しく少なく、最大でも183.4gである。
4. 頭蓋片は少なく、大部分は四肢骨片ばかりで、火を受けた時に生じる変形と亀裂が認められる。
5. 性別を推測することができたものが2例存在する。1例は「ST-1」で、膝蓋骨が大きいことから男性であろう。もう1例は「ST-2」で、上腕骨が太く、大腿骨の粗線の発達も良好なことから男性と推定した。
6. ST-1では「のどぼとけ」と俗称される第二頸椎の一部を確認した。火葬骨の残存量が少ないにもかかわらず、第二頸椎が確認できたことから、意図的に埋納された可能性が強い。また、ST-2には第一頸椎が残存していたが、第二頸椎と誤認して埋納された可能性もある。

謝辞

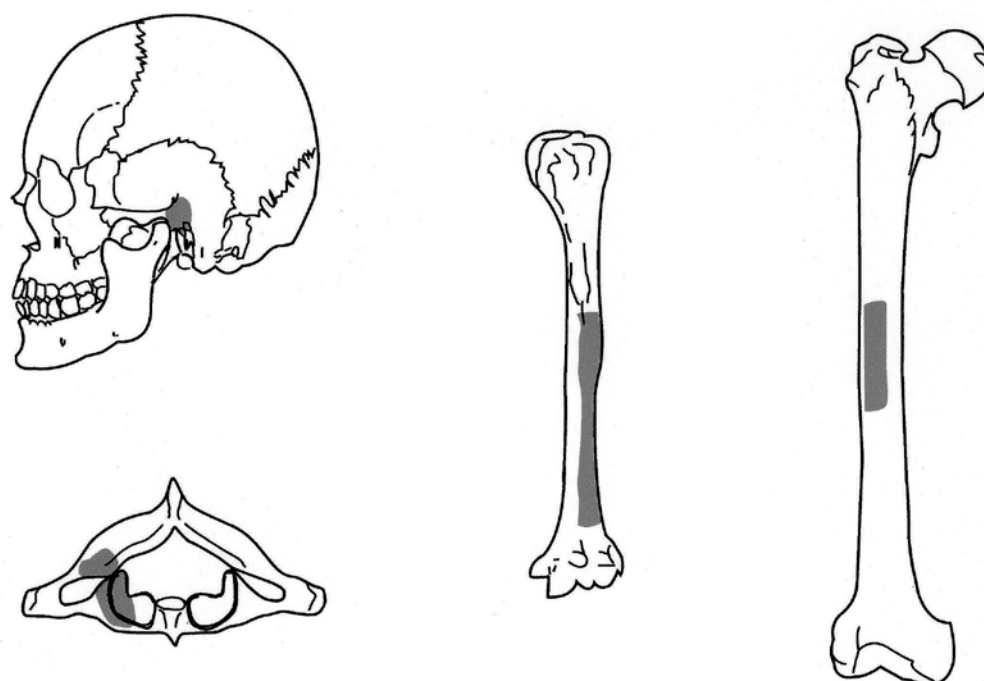
《擲筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいたNPOヒロシマ文化・健康サポートセンターの皆様へ感謝致します。》

《参考文献》

1. 松下孝幸、1987：広島市大明地遺跡出土の火葬骨。山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集）：312-314.
2. 松下孝幸、1997：広島市渠取遺跡出土の近世火葬骨。広島市安佐南区高取北三丁目所在渠取遺跡発掘報告（（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第21集）：17-20.
3. 松下孝幸、1997：広島県豊平町地徳古墓出土の中世人骨。国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第152集）：51-59.
4. 松下孝幸、1999：広島県東広島市西本3・4号遺跡出土の近世人骨。西本3・4号遺跡（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第175集）：123-139.
5. 松下孝幸、1999：広島県府中市門田A遺跡・東槇山第1号古墳南斜面出土の人骨。門田A遺跡・東槇山第1・4号古墳（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第183集）：103-112.
6. 松下孝幸、2004：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店
7. 松下孝幸、2006：広島県北広島町中山出土の火葬骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第1号：1-4.



幾志山城跡出土人骨・ST-1（男性・年齢不明）



幾志山城跡出土人骨・ST-2（男性・年齢不明）

図2 人骨の残存図(アミかけ部分)

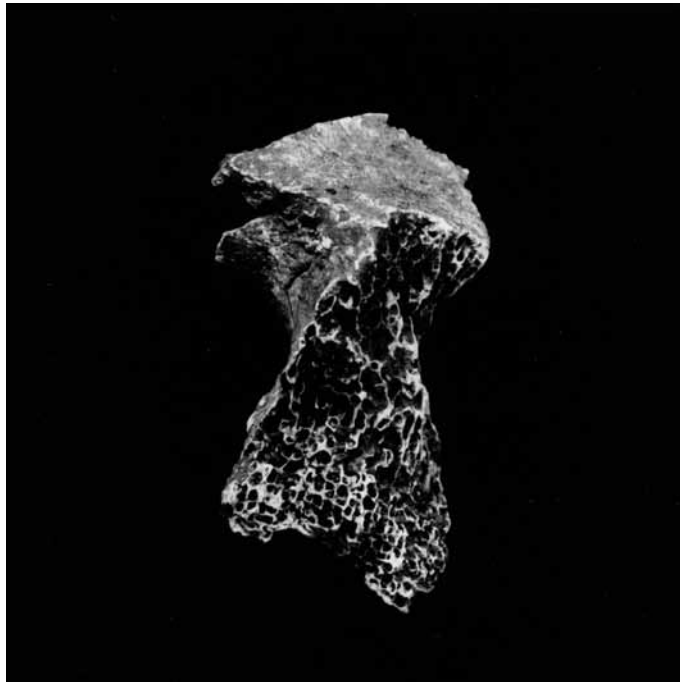
(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



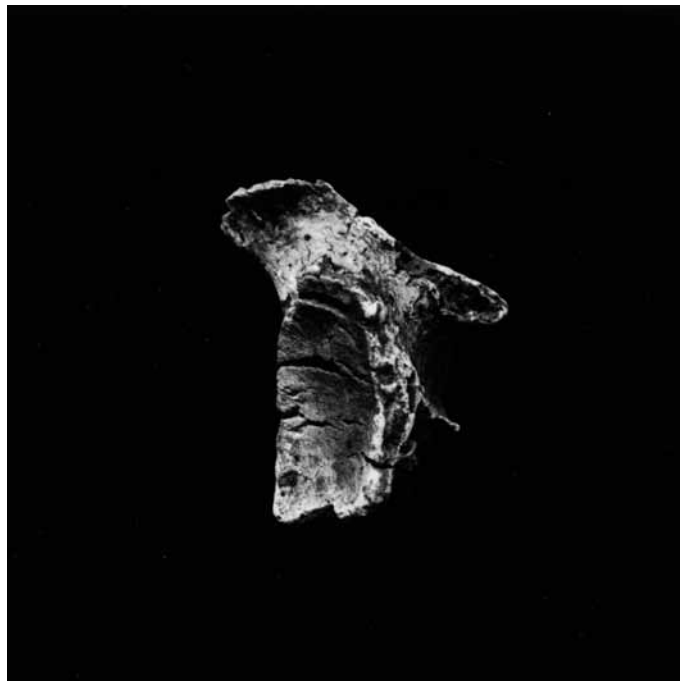
火葬骨 (The cremated bones)
幾志山城 ST-1 人骨 (男性)
(The kishiyamajo ST-1,male)



火葬骨 (The cremated bones)
幾志山城 ST-2 人骨 (男性)
(The kishiyamajo ST-2,male)



第二頸椎（軸椎）（Atlas）
幾志山城 ST-1 人骨（男性）
(The kishiyamajo ST-1,male)



第一頸椎（環椎）（Axis）
幾志山城 ST-2 人骨（男性）
(The kishiyamajo ST-2,male)

図 版



1. 調査前風景（上空北から）



2. 幾志山城南西側斜面（南西から）



1. 幾志山城から西方向の風景
(東から)



2. 幾志山城から南方向の風景
(北から)



3. 幾志山城から北東方向の風景
(南西から)

図版 3



1. 調査区東方向風景
(大歳神社を望む)



2. 調査区全景
(低空東から)



3. 調査区全景
(真上南西から)



1. 調査区北側全景
(南東から)



2. 調査区南側全景
(北西から)



3. 火葬墓 (Pit12・15)
土層断面 (北から)



1. SX4 石列検出状況
(北から)



2. SX4 完掘状況
(北から)



3. SB 1 完掘状況
(南東から)



1. SD4 石検出状況
(南西から)



2. SD4 石検出状況
(北東から)



3. SD4 完掘状況
(北東から)



1. SD4 上層青磁碗出土状況
(北西から)



2. SX1 階段状遺構検出状況
(南東から)



3. SX1 下層石出土状況
(南から)



1. SK1 上層
遺物出土状況（東から）



2. SK1 鉄鎌出土状況
（東から）



3. SK3 鉄鎌出土状況
（北から）



1. H・I区土層断面
(北東から)



3. Pit6 遺物出土状況 (南東から)



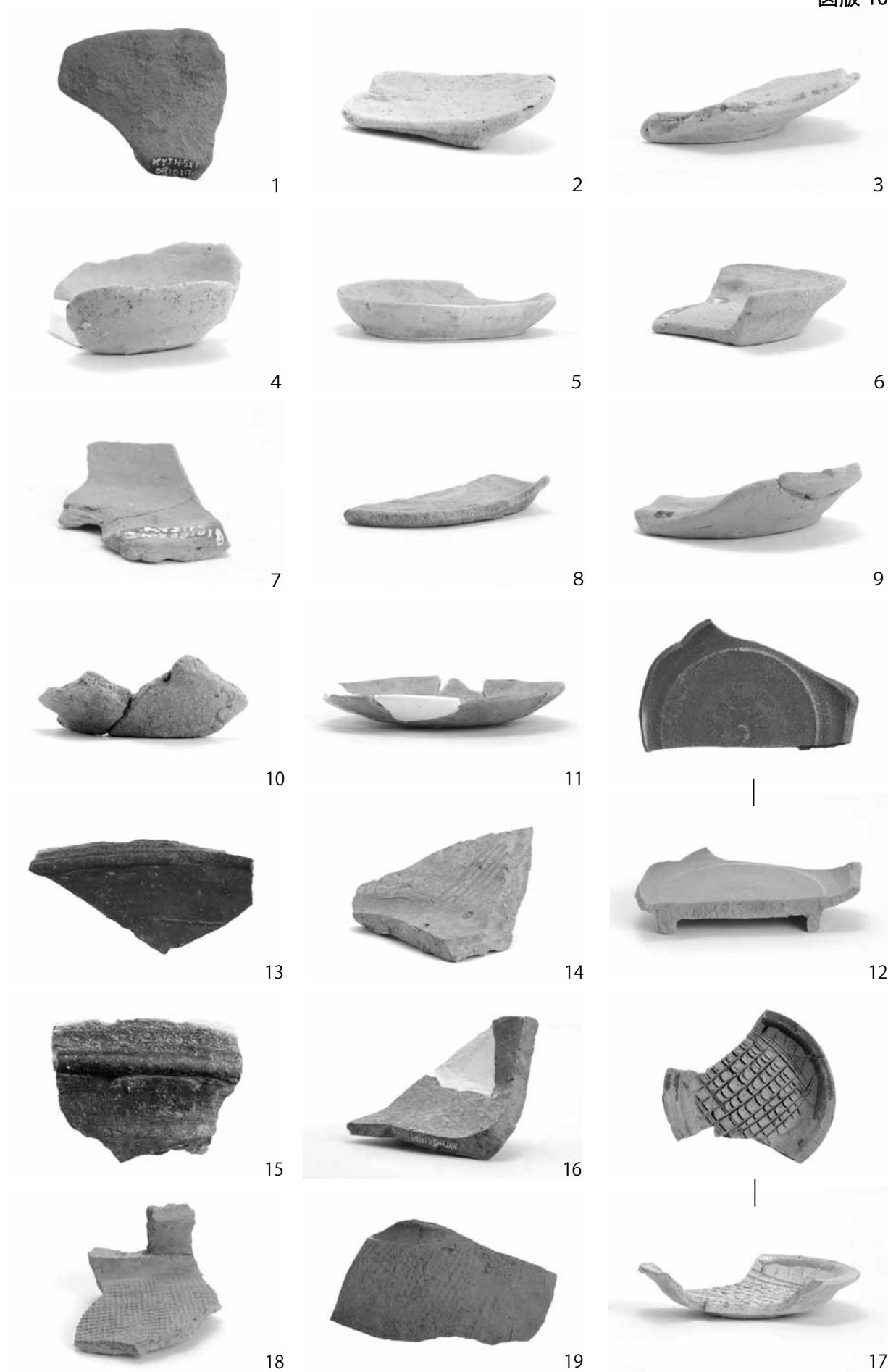
4. Pit54 遺物出土状況 (北西から)



2. SX2 石検出状況
(北から)



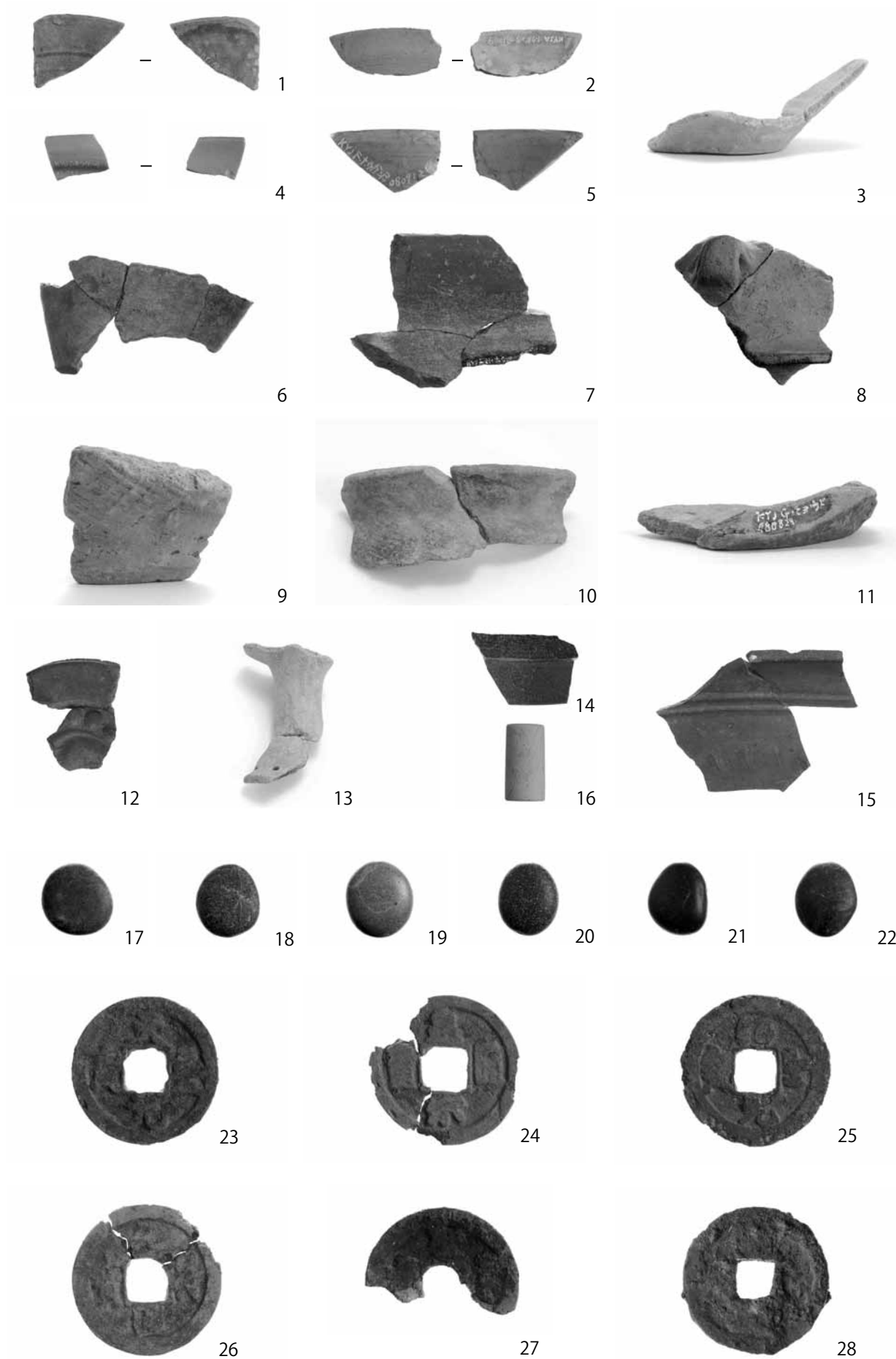
5. 調査終了直後の幾志山城跡
(大歳神社から望む)



出土遺物①



出土遺物②



出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	きしやまじょうあととはくつちょうさほうこくしょ							
書名	幾志山城跡発掘調査報告書							
副署名								
巻次								
編著者名	濱岡大輔							
編集機関	特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンター							
所在地	広島市東区光町二丁目9番22－601							
発行機関	財団法人広島市文化財団							
所在地	広島市東区光町二丁目15番36号							
発行年月日	2008年1月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
きしやまじょうあと	ひろしましあさきたくくちたみなみ2ちょうめ	34106		34度 27分 21秒	132度 29分 38秒	2008年 8月5日 ～10月 17日	400㎡	住宅地造成工事に伴う調査
	広島市安佐北区口田2丁目289番2他7筆							
幾志山城跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	城跡	中世	郭・溝・土坑・階段状遺構		陶磁器・土師質土器・須恵器		14世紀～15世紀代の城跡	

幾志山城跡

発掘調査報告書

一広島市安佐北区口田南二丁目所在一

2009年1月

編集 特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター

発行 財団法人 広島市文化財団

印刷 朝日精版印刷株式会社